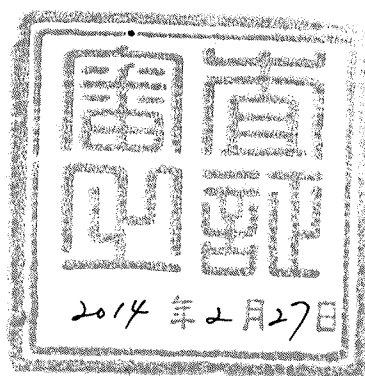


里山における
住民主体の竹伐採活動
の継続要因



2014 年

九州大学工学部 地球環境工学科

建設都市工学コース

河津 憲嗣



70. The reasons for continuing efforts to cut down bamboo in satoyama by civil society organizations

Noritsugu KAWAZU

Today it is problem for Japan that bamboo grows abundantly in satoyama (rural forests) because a lot of bamboo forest in satoyama is abandoned. Abandoned Bamboo causes to change landscape and ecosystem. Bamboo grows up very fast, so it is necessary to cut down bamboo continuously. The purpose of this study is to clarify the reasons for the continuing efforts to cut down bamboo in satoyama by civil society organizations.

We searched civil society organizations of Yamaguchi, Fukuoka, Saga and Oita Prefecture which cut down bamboo more than a decade. We searched these organizations on the Internet and telephoned them, and then we focused on six civil society organizations and surveyed by face-to-face interviews.

According to this survey, the reasons for continuing efforts to cut down bamboo in satoyama by civil society organizations are three reasons. First reason is that civil society organizations have activities using bamboo or produced space. Second reason is that civil society organizations have system to maintain their effort for example system of increasing members and management system of funds. Third reason is that civil society organizations have active communication within the organization.

These three reasons affect the continuing efforts to cut down bamboo in satoyama by civil society organization. The study concludes that it is important for civil society organizations cutting down bamboo in satoyama to know bamboo and bamboo forest are of value, to become familiar with their effort, to increase people cooperating with, and to make good community in the civil organization.

70. 里山における住民主体の竹伐採活動の継続要因

河津憲嗣

1. 目的

近年、外国からの安価なタケノコの輸入や、プラスチック製品の普及により資材として竹が使用されることが減り、我が国の里山での竹林の管理放棄が問題となっている。繁殖力の強い竹は他の植物の成長を妨げ、その結果生態系を単一化させ、地域特有の風景を変えてしまうといった問題がある。

竹は成長速度が速いため、定期的に継続して伐採活動を行う必要がある。そこで本研究では、長期継続して竹伐採活動を行っている市民団体に着目し、竹伐採を継続的に取り組むための要因について明らかにすることを目的とする。

2. 内容

2-1. 研究方法

研究対象は、山口県・福岡県・佐賀県・大分県において、10年以上住民主体で里山の竹伐採活動を行っている団体とする。

本研究では、予備調査としてインターネットと電話で里山の竹伐採活動を10年以上行っている団体6件を抽出した。インターネットでの調査では、竹林・里山・市民活動等のキーワードで検索を行った。抽出した6件に対面での聞き取り調査を実施した。

聞き取り調査の内容は、会員数、会費、活動目的、活動内容についてである。

本稿では、6件のヒアリングの結果から活動内容として、積極的に地域住民との協働が見られた3団体について抽出し、竹伐採活動の継続要因について比較し分析した。かぐや姫の里づくりの会・萩里山応援隊こもれば・かいろう基山の3団体について調査結果および結果の分類を示す。

2-2. 調査結果

聞き取り調査の結果を表1に示す。

かぐや姫の里づくりの会では、第1・第3土曜日に竹伐採活動を行っている。活動に必要な資金は県から助成金を受けることで確保している。さらに、伐採した竹を利用して竹細工教室を開催することや、そうめん流し・門松づくりの材料とすることで伐採した竹を利用している。また平成16年からはやまぐちバンブーオーケストラを結成し、伐採した竹で楽器を作り秋に竹林内で演奏会を行い、伐採した竹と竹伐採後の跡地を利用している。毎年11月には、活動場所で団体メンバーと鍋会を開き、団体メンバーとの交流を行っている。

萩里山応援隊こもればは、田床山の広域基幹林道福萩線の道路沿いの竹を伐採している。伐採した竹は竹炭・竹燈籠・竹垣として活用している。

団体名	かぐや姫の里づくりの会	萩里山応援隊こもれば	かいろう基山
ヒアリング日	2013年12月1日	2013年12月9日	2013年12月13日
ヒアリング対象者	団体代表	団体代表	団体事務担当
活動場所	山口県下関市王喜地区	山口県萩市田床山	佐賀県三養郡基山町
会員数	10名	13名	53名
会費	無し	年間一人当たり2000円	年間一人当たり2000円
活動目的	荒れた竹林の再生復活と竹の有効活用	田床山の荒れた竹林の伐採	里山再生と地域社会への貢献
活動内容	団体メンバーのみで行う活動	・竹伐採活動 ・研修旅行 ・竹炭づくり	・竹伐採活動 ・竹細工、竹パウダーづくり ・竹炭づくり
	団体以外の住民と共に 行う活動	・竹を伐採した竹林内で竹楽器を用いたコンサート ・門松づくり ・竹垣づくり ・竹燈籠づくり ・そうめん流し	・竹伐採イベント ・下刈りイベント ・植樹祭 ・育林市民力養成講座

表1 10年以上竹伐採活動を行う団体への聞き取り調査結果

活動に必要な資金は県からの助成金と会費で確保している。また地域住民と共同で竹垣の製作、門松づくりを行うことでも伐採後の竹の利用を行っている。竹伐採活動を行う日には、午前中に竹伐採活動を行い午後からはわらび取りや花見をするなどの遊びを行い、また毎年 11 月には団体研修旅行を行うことで、団体メンバーとの交流を行っている。

かいろう基山では、里山再生と地域社会への貢献を目的に活動している。毎週火曜日から土曜日の午前中に竹を伐採し、その跡地を利用して植樹活動を行っている。活動に必要な資金は行政・企業から助成を受けることで確保しており、年会費および製作した竹製品の販売による売り上げを会の維持費として使用している。伐採した竹は竹パウダーや竹細工として活用している。また地域住民と協働で竹伐採・下刈り・植樹活動を年 7 回行っており、森づくりのリーダー養成を目的とした育林市民力養成講座を開講している。

3. 結論

2-2.より団体の組織体制と活動内容を分析すると、住民主体による里山の竹伐採活動の継続要因は次の 3 点が考えられる。

(1) 竹伐採活動に関連した竹や伐採跡地を利用する活動

かぐや姫の里づくりの会では、伐採した竹をそうめん流し・門松・竹細工に使用しており、地域住民と共同で取り組んでいる。竹伐採跡地はタケノコ堀りを行う空間として活用しており、将来的には介護施設で暮らす住民の癒しの場とするという展望がある。萩里山応援隊こもればでは、伐採した竹を萩市内で行われるイベントに用いる竹燈籠として活用し、地域住民と共に門松づくりを行っている。竹伐採跡地にはセンリョウを植樹しようと試みている。かいろう基山では、伐採した竹を竹パウダーに加工することや竹細工の材料として活用している。竹伐採跡地はクス・シイ・ヤマモモ・ヤマザクラを植樹する空間として活用しており、毎年 2 月に地域住民と共に植樹祭を行っている。これらの団体では、伐採後の竹を資源とし

て活用しており、竹伐採跡地は植樹や癒しの場として使用している。このように、竹伐採活動によって得られた竹や伐採跡地に利用目的がある。

(2) 団体を維持する仕組み

かぐや姫の里づくりの会・萩里山応援隊こもれば・かいろう基山では、竹伐採活動に必要な経費を行政から受ける助成金で賄っており、会の維持管理費や会内での交流活動に必要な経費には、会費や製作した竹製品を売る事で得た資金を使用している。

またこれらの団体では、会員の知人に声掛けをすることや、活動場所周辺に住む会員以外の住民と共に活動を行うことで、団体に興味を持つ住民を増やし、会員を得ている。

このようにそれぞれの団体において、団体が活動する際に必要な資金や人員を得る仕組みがある。

(3) 竹伐採活動に関連した団体メンバー間での交流活動の活発さ

かぐや姫の里づくりの会では、団体メンバー間での交流活動として 11 月に竹伐採活動後に活動場所にて鍋を食べる行事を行っている。萩里山応援隊こもればでは、団体メンバー間での交流活動として竹伐採活動を終えた後に、わらび取りや花見会を行っており、また年に 1 度環境学習を目的に研修旅行を行っている。かいろう基山では活動拠点のかいろうの館で活動の間に雑談を楽しんでいる。これらの団体では、竹伐採活動の他に団体内での交流がある。このことから、団体メンバー間の交流活動が活動の継続要因になっていると考えられる。

以上より、竹伐採活動に関連した竹や伐採跡地を利用する活動、団体を維持する仕組み、竹伐採活動に関連した団体メンバー間での交流活動の活発さの 3 点が竹伐採活動の継続要因となっていると考えられる。

本研究では、住民主体による里山の竹伐採活動の継続要因 3 点を明らかにした。地域の協力の輪を集めること、竹や竹伐採跡地の有効利用をすること、メンバーとの結束力を高めることが会を継続させるのではないだろうか。

目次

第1章 序論	・・・ 1
1.1 研究背景と目的	
1.2 既往研究	
第2章 研究方法	・・・ 4
2.1 対象事例の選定	
2.2 研究方法	
第3章 ケーススタディ	・・・ 6
3.1 山口県下関市王喜地区「かぐや姫の里づくりの会」	
3.1.1 かぐや姫の里づくりの会の基礎情報	
3.1.2 かぐや姫の里づくりの会の発足と歩み	
3.1.3 現在のかぐや姫の里づくりの会の活動内容	
3.1.4 かぐや姫の里づくりの会の継続要因	
3.1.5 かぐや姫の里づくりの会の課題	
3.2 山口県萩市田床山「萩里山応援隊こもれび」	
3.2.1 萩里山応援隊こもれびの基礎情報	
3.2.2 萩里山応援隊こもれびの発足と歩み	
3.2.3 現在の萩里山応援隊こもれびの活動内容	
3.2.4 萩里山応援隊こもれびの竹伐採活動の継続要因	
3.2.5 萩里山応援隊こもれびの課題	
3.3 山口県周南市鼓南地区「鼓南なんでもやろう会」	
3.3.1 鼓南なんでもやろう会の基礎情報	
3.3.2 鼓南なんでもやろう会の発足と歩み	
3.3.3 現在の鼓南なんでもやろう会の活動内容	
3.3.4 鼓南なんでもやろう会の継続要因	
3.3.5 鼓南なんでもやろう会の課題	
3.4 山口県柳井市日積地区「Seeds」	
3.4.1 Seeds の基礎情報	
3.4.2 Seeds の発足と歩み	
3.4.3 現在のSeeds の活動内容	
3.4.4 Seeds の継続要因	
3.4.5 Seeds の課題	
3.5 福岡県糟屋郡新宮町寺浦地区「わいわいクラブ」	
3.5.1 わいわいクラブの基礎情報	
3.5.2 わいわいクラブの発足と歩み	
3.5.3 現在のわいわいクラブの活動内容	

- 3.5.4 わいわいクラブの継続要因
- 3.5.5 わいわいクラブの課題
- 3.6 佐賀県三養基郡基山町園部地区「かいろう基山」
 - 3.6.1 かいろう基山の基礎情報
 - 3.6.2 かいろう基山の発足と歩み
 - 3.6.3 現在のかいろう基山の活動内容
 - 3.6.4 かいろう基山が考える園部地区の将来構想
 - 3.6.5 かいろう基山の活動の継続要因
 - 3.6.6 かいろう基山の課題

第4章 考察

・・・ 49

- 4.1 各団体の竹伐採活動に関連した会員同士での交流活動の活発さ「
- 4.2 各団体が行う竹伐採活動の適当な作業量
- 4.3 竹伐採活動に関連した活動の存在
- 4.4 一般参加者を交えたイベントの開催

第5章 結論

・・・ 53

謝辞

・・・ 54

第 1 章

序論

第1章 序論

1.1 研究背景と目的

近年、外国からの安価なタケノコの輸入や、プラスチック製品の普及により資材として竹が使用されることが減り、我が国の里山での竹林の管理放棄が問題となっている¹⁾。繁殖力の強い竹は他の植物の成長を妨げ、その結果生態系を単一化させ²⁾、地域特有の風景を変えてしまうといった問題がある³⁾。

竹は繁殖力が強く、成長速度が速いため、定期的に継続して伐採活動を行う必要がある⁴⁾。

里山の荒れている竹林を伐採に地域の住民が取り組むことは、地域活性化の面でも重要だと筆者は考える。そこで本研究では、長期継続して竹伐採活動を行っている市民団体に着目し、竹伐採を継続的に取り組むための要因について明らかにすることを目的とする。

1.2 既往研究

里山における放置竹林に問題意識を持ち活動を行っている団体に関する先行研究がある。草葉らは竹林の保全活動の参加者を対象に調査を行い、年度・季節毎の参加者の動向を研究している⁵⁾。湯本らは竹林の環境保全機能に対する意識調査を活動している団体及び都市部の一般市民に対して行い、竹林の管理活動への参加意欲を明らかにしている⁶⁾。

市民団体の活動の継続要因についての先行研究も行われている。伊東らは、住民主体のまちづくり活動の継続性を活動している人に着目し研究を行っている⁷⁾。米澤はボランティア活動の継続要因を場所・時間・資金等の手段的支援の視点と、仲間の存在や地域への愛着等の情緒的支援の視点から明らかにしている⁸⁾。

以上の研究から、里山の竹を対象に活動を行う団体に着目した研究、また市民団体の活動についての研究は見られるが、本研究が意図する里山における住民主体の竹伐採活動の継続要因を明らかにする研究は見られない。

参考文献

- 1) 柴田昌三 (2001) : モウソウチクと日本人 : 日本緑化工学会誌 28(3),406-411
- 2) 瀬嵐哲央・丸真喜子・大森美紀・西井武秀 (1989) : 竹林群落の構造と遷移と特徴 : 金沢大学紀要自然科学編 38,25-40
- 3) 木村栄理子・深町加津枝・古田裕三・奥敬一・柴田昌三 (2007) : 嵯峨嵐山における竹林景観の実態と景観保全施策に関する研究 : ランドスケープ研究 70 (5) ,605-610
- 4) 藤井義久・重松敏則 (2008) : 継続的な伐竹によるモウソウチクの再生力衰退とその他の植生の回復 : ランドスケープ研究 71 (5) ,529-534
- 5) 草葉敏一・デワンカー・バート (2011) : 竹林保全活動における参加者に関する研究 : 日本建築学会九州支部研究報告第 50 号,489-492
- 6) 湯本裕之・倉本宣 (2005) : 都市部ニュータウンにおける竹林の環境保全機能に対する住民の意識 : ランドスケープ研究 68 (5) ,773-778
- 7) 伊東賢治・福田由美子 (2005) : 住民主体のまちづくり活動の継続性に関する研究—人材に関するパートナーシップのあり方についての考察 : 日本建築学会中国支部研究報告集第 28 巻,729-732
- 8) 米澤美保子 (2010) : ボランティア活動の継続要因 : 関西福祉科学大学紀要第 14 号,31-41

第 2 章

研究方法

第2章 研究方法

2.1 対象事例の選定

里山における住民主体の竹伐採活動の継続要因を明らかにするため、研究対象は、山口県・福岡県・佐賀県において、10年以上住民主体で里山の竹伐採活動を行っている団体とした。

始めに、インターネットを用いて「竹林・里山・市民活動」等のキーワードで10年以上活動を行い、地域の竹を地域住民で伐採している団体を6件抽出した（表1）。

2.2 研究方法

上記6団体に対し、活動の経緯や現状を詳細に把握する目的で、各団体の活動場所またはその周辺にて会員の代表・事務担当者に対面での聞き取り調査を実施した。調査実施期間は平成25年12月～平成26年2月である。質問項目は図1のヒアリングシートに記載している。

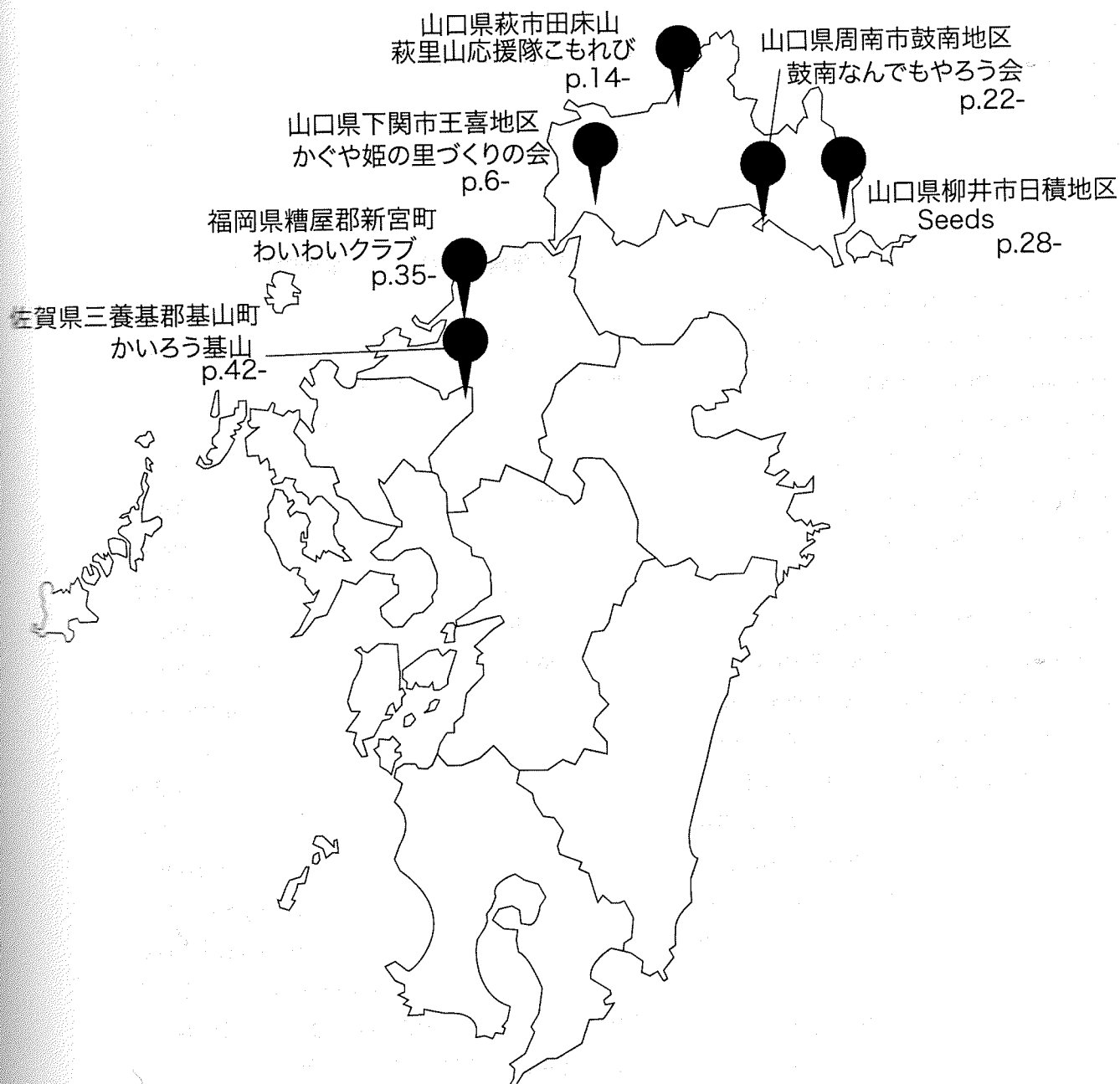
6団体の聞き取り調査結果から、竹伐採活動の活動初期の団体の視点から学ぶべき事を挙げる。また、複数の団体で見られた活動内容を竹伐採活動の継続要因として定義する。

表-1 各団体の聞き取り調査の対象者と調査日時

団体名	ヒアリング対象者	役職	ヒアリング日時
かぐや姫の里づくりの会	上野建司氏	代表	12/1,12/10,12/23(イベント参加),1/18(活動参加),2/18
萩里山応援隊こもれび	河田直子氏	代表	12/9,1/19,2/14(電話)
鼓南なんでもやろう会	H氏	事務	12/21,1/20,2/14(電話)
Seeds	西本利治氏	代表	12/22,1/21
わいわいクラブ	青山直子氏	代表	12/27,1/30
かいろう基山	松原幸孝氏	事務	12/13,1/24,2/7(活動参加)

第3章 ケーススタディ

調査対象団体



第3章 ケーススタディ

3.1 山口県下関市王喜地区「かぐや姫の里づくりの会」

3.1.1 かぐや姫の里づくりの会の基礎情報

かぐや姫の里づくりの会は、2002年（平成14年）に設立され、山口県下関市王喜地区で里山再生と地域活性化を目的に竹伐採活動を行っている住民団体である（図・2）。現在の会員数は10名で、王喜地区の住民の他に下関市内（勝谷・椋野）の住民、宇部市の住民で構成される。2010年までは会員から一人当たり2000円の会費を集めていたが、現在は会員が少なくなったため年会費は取っていない。道具の維持費等活動に必要な資金は年会費の他に王喜小学校での環境学習の謝礼金、年末の門松づくりで得た収益で賄っている。2013年3月に会が所有していた倉庫が無差別放火の被害に会い、イベント時に一般参加者に貸し出すノコ・ナタがすべて無くなった。そこで下関農林事務所に助成金を申請、承認されたので現在は道具の再購入を検討している。

3.1.2 かぐや姫の里づくりの会の発足と歩み

表・2にかぐや姫の里づくりの会の歩みを示す。王喜地区はタケノコ産地であったが、地域に住む住民の高齢化や竹材の使用機会が減ったことで、竹林に人手が入らなくなり管理されない竹林が増えた。そのため、2001年（平成13年）に豊田農林事務所（現下関農林事務所）・西部森林組合・王喜地区の竹林所有者で里山再生についての話し合いを行い、2002年（平成14年）に竹林所有者7名と下関市内や宇部市など王喜地区周辺の住民7名の14名で“かぐや姫の里づくり実行委員会”を結成した。また竹の伐採活動に参加する短期ボランティアを周辺住民・農林事務所・森林組合に募集し、集まった人を“かぐや姫の里づくり協力隊”としてかぐや姫の里づくり実行委員会と共に伐採活動を行っていた。

会の結成から3年間は豊田農林事務所・西部森林組合から道具の使用方法を教わる事や、イベント時の人集めなどの協力を受けて活動を行っていた。活動の形態が定まった時点で農林事務所・森林組合からの協力が無くなり、王喜地区及び下関市や宇部市などの周辺都市の住民で構成される会員のみでの活動になった。またこの時に、かぐや姫の里づくりの会実行委員会は、かぐや姫の里づくりの会に名称を変更した。後述の各種イベントに参加した一般参加者の住民が会に加入することで会員数が増えていき、2005年には40名程度の会員があった。

2004年には、竹を有効利用する目的で、竹楽器を使い演奏を行う団体“山口バンブーオーケストラ”を結成した。下関市内での演奏会を行っていたが、山口市・岩国市でこの取り組みに影響されて同様な団体が結成された。そのため、2005年に山口バンブーオーケストラはしものせき竹アンサンブルに名称を変更した。

2010年まで活動内容に変化はなかったが、竹細工・竹かご教室の講師を担当していた会員が退会したことで、竹細工・竹かご教室は開催しなくなった。また会員が年齢や退職後の里帰りをきっかけに退会していくことが増え、2010年には会員が10名程度になった。また会員数が減ったことにより、年会費が廃止されて活動資金は環境教育の謝礼金と門松づくりの収益のみで賄うことになった。

2013年3月にかぐや姫の里づくりの会の活動場所が無差別放火の被害を受け、倉庫が焼失した。

この倉庫にはイベント時に一般参加者に貸すためのノコ・ナタ・バチそれぞれ 20 本程度が保管されていたが、すべて使えなくなった。そのため、2013 年にはイベント内容が減り、王喜小学校への環境学習、竹林コンサート、ミニ門松づくりのみ行った。これらの道具を再びそろえるために、農林事務所に助成金を申請し、承認された。定例の竹伐採活動で用いるチェーンソーや草刈り機は個人で持ち帰っていたので燃えずに済み、定例の活動は続けることができた。無差別放火の被害を受けたが、かぐや姫の里づくりの会には「王喜地区の荒れた竹林をきれいにし、里山を癒しの空間にすることを成し遂げたい」という思いがあり、そのため閉会には至らなかったと上野氏はおっしゃった。

3.1.3 現在のかぐや姫の里づくりの会の活動内容

図-3 にかぐや姫の里づくりの会がこれまでに竹を伐採した範囲と現在確認できる残存の竹林を示す。かぐや姫の里づくりの会が実施する竹の伐採活動は会員のみで行っており、季節によらず第一土曜日と第三土曜日の 8:30 から 15:00 までの時間である。かぐや姫の里づくりの会が活動を行う土地は、すべて会員の土地である。雨天の日は安全のために活動していない。竹伐採作業には会員から平均 7 名の参加があり、竹の伐採は個人のチェーンソー 1~2 台を用いて行い、伐竹・玉切りを行う（写真-1）。それ以外の会員は玉切りした後の竹を整理する他、竹林内の除草作業を行う。これらの作業工程で、一日におよそ 100 本の竹を切っている。竹の処理は、風のない日に活動場所の広場で燃やしている（写真-2）。活動中は 1 時間ごとに休憩をはさみ、会員が持ってきた差し入れを囲んで雑談を楽しんでいる（写真-3）。また毎年 11 月には、活動場所にて鍋会を開催し、メンバー同士の交流を楽しんでいる。こういった定例活動の形態は会の結成当初から変わっていない。

2012 年まで行っていた会員以外の地域住民と共に行う活動としては、会員の知人への声掛けで集まった住民と共に行う四季の里山体験交流会、王喜小学校の児童に向けた竹林を使った環境教育、年末に下関市街地の商業施設で行うミニ門松作りがあった（写真-4）。四季の里山体験交流会は、春はタケノコ掘り・夏はそうめん流し・秋は竹林コンサートとお月見会・冬は下関市内の商業施設でミニ門松づくりを行っていた。2013 年 3 月の無差別放火の被害に会い一般参加者向けの道具が焼失したことにより、2013 年は王喜小学校での環境学習、竹林コンサート、ミニ門松づくりのみ開催した。2014 年からは 2012 年のような活動形態に戻す予定である。

3.1.4 かぐや姫の里づくりの会から学ぶべき事

かぐや姫の里づくりの会から学ぶべき事として、以下の4点が考えられる。

1. 目的意識の共有

2013年3月に無差別放火の被害に遭ったが、王喜地区の荒れた竹林をきれいにし、癒しの空間にするという目的があることで会を閉会させずに活動を続けていることから、会員内で目的意識が共有されている。

2. 竹伐採活動に関連する活動

かぐや姫の里づくりの会では、伐採後の竹を竹細工・そうめん流し・竹楽器・ミニ門松に活用し、周辺住民との交流活動に使用している。また、竹伐採後の跡地をタケノコ堀りや竹林コンサート会場として活用している。このように竹や竹伐採後の跡地に利用目的があり、竹伐採活動に関連する活動を行っている。

3. 竹伐採活動に関連する会内部での交流の活発さ

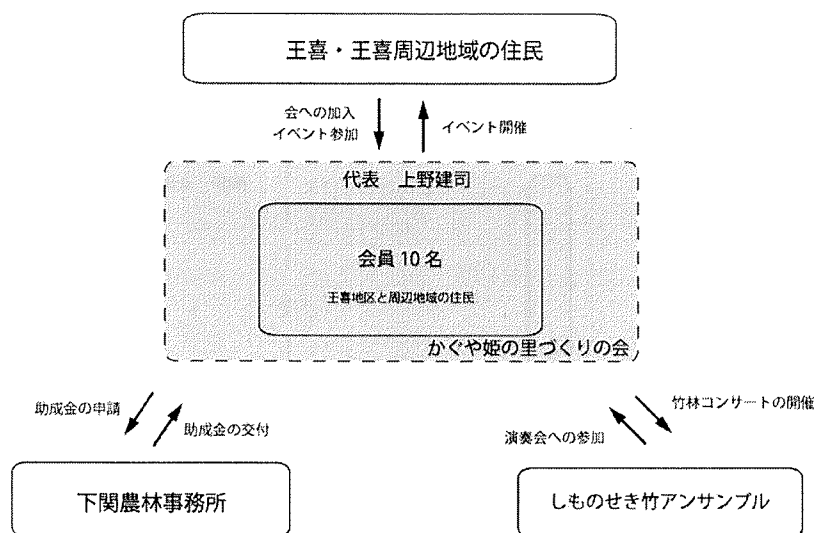
かぐや姫の里づくりの会では、活動の休憩中に会員同士での雑談を行っている。また会員各々が他の会員に差し入れを持ってくる。竹を燃やしている最中も雑談を楽しみながら作業している。また毎年鍋会を行い、メンバー同士で楽しんでいる。これらの交流を目的に活動に参加するメンバーもいる。これらのことから、会内部での交流の活発さが会員の活動に参加するモチベーションに繋がっていると言える。

4. メンバー以外の住民との交流の活発さ

かぐや姫の里づくりの会では、里山体験交流会や竹細工教室等メンバー以外の住民と共に行うイベントを開催していた。これらのイベントは、竹の有効利用の促進のために行っていたが、イベント参加後にメンバーに加入する参加者も見られた。またミニ門松づくりのイベントは毎年恒例の行事になり、開催場所である商業施設がかぐや姫の里づくりの会のために、毎年予め会場を確保している。これらのことから、かぐや姫の里づくりの会にはメンバー以外の住民との交流の活発さがある。

3.1.5 かぐや姫の里づくりの会の課題

かぐや姫の里づくりの会の会員は2005年の40名をピークに、年齢や退職後の移住を理由に会員数が減り、現在は10名になっている。また、初期より行っていた竹細工教室も、講師を担当していた会員が退会したことにより教室も開催しなくなった。このことから、活動を次世代に繋げるためにも、会に加入する人を増やし、後継者を育てていくことがかぐや姫の里づくりの会の課題だと言える。



図・2 かぐや姫の里づくりの会の事業主体図

	会内部での出来事	地域社会と共に行う活動	備考
2002 年	かぐや姫の里づくり実行委員会 結成		農林事務所と西部森林組合の協力
2003 年			
2004 年		山口パンパーオーケストラ結成 山口県内で竹楽器で演奏する会が出来る	
2005 年	かぐや姫の里づくりの会に名称変更	下関竹アンサンブルに名称変更 竹籠教室 里山体験交流活動 下関市街地の商業施設でミニ西松づくり 竹林コンサート及びお月見会 そうめん流し タケノコ掘り	
2006 年			
2007 年			
2008 年			
2009 年			
2010 年	会員が減ったことで年会費を無くす		竹細工の講師を務めていた 会員の退会
2011 年			
2012 年			
2013 年	熊差別放火の被害を受け、倉庫が無くなった 助成金申請		イベント縮小
2014 年			

表・2 かぐや姫の里づくりの会の歩み

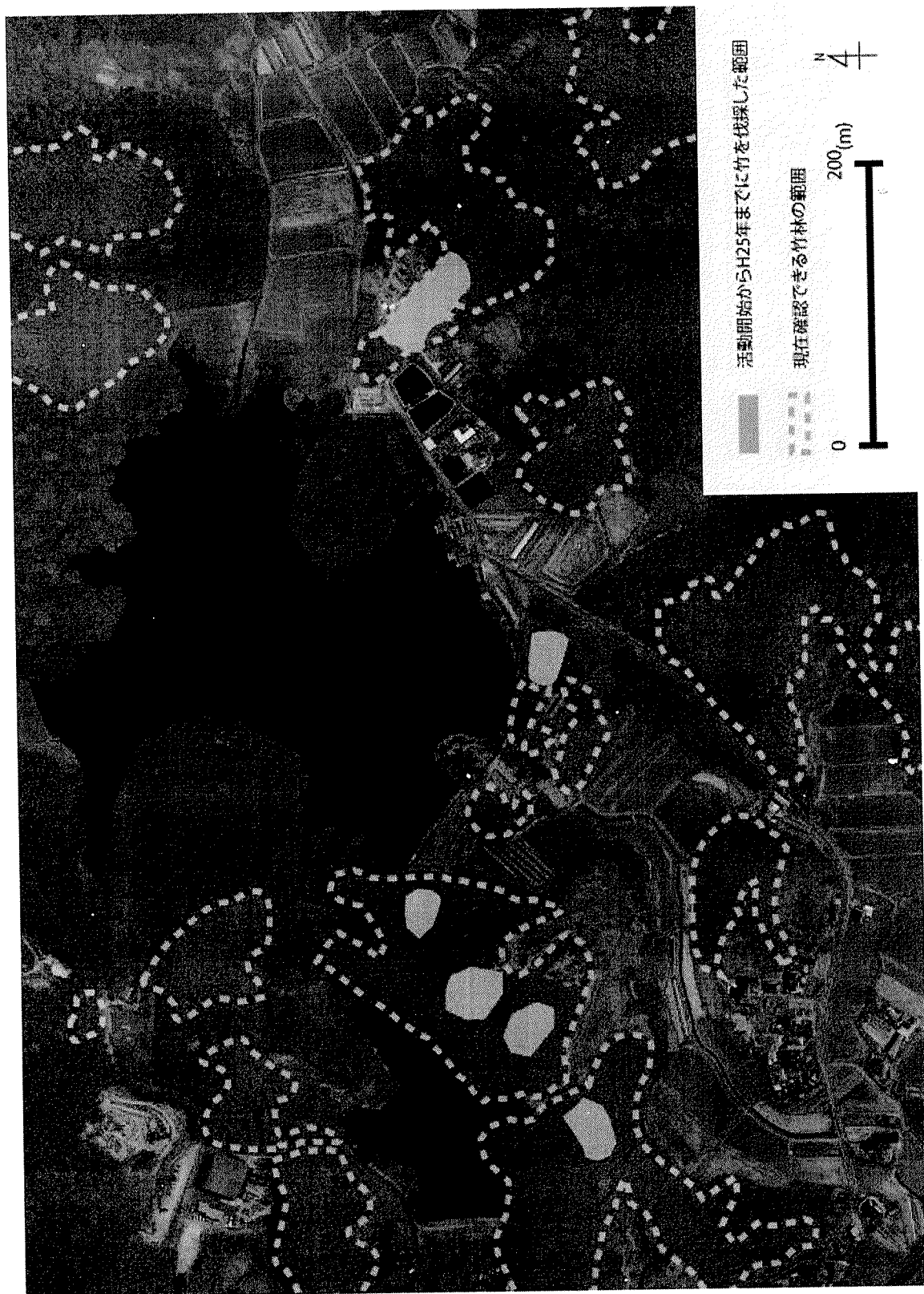


図-3 かぐや姫の里づくりの会が行った竹伐採活動の範囲と現在確認できる残存の竹林



写真-1 かぐや姫の里づくりの会が行う竹の伐採



写真-2 活動場所の広場で竹を燃やして処理している様子

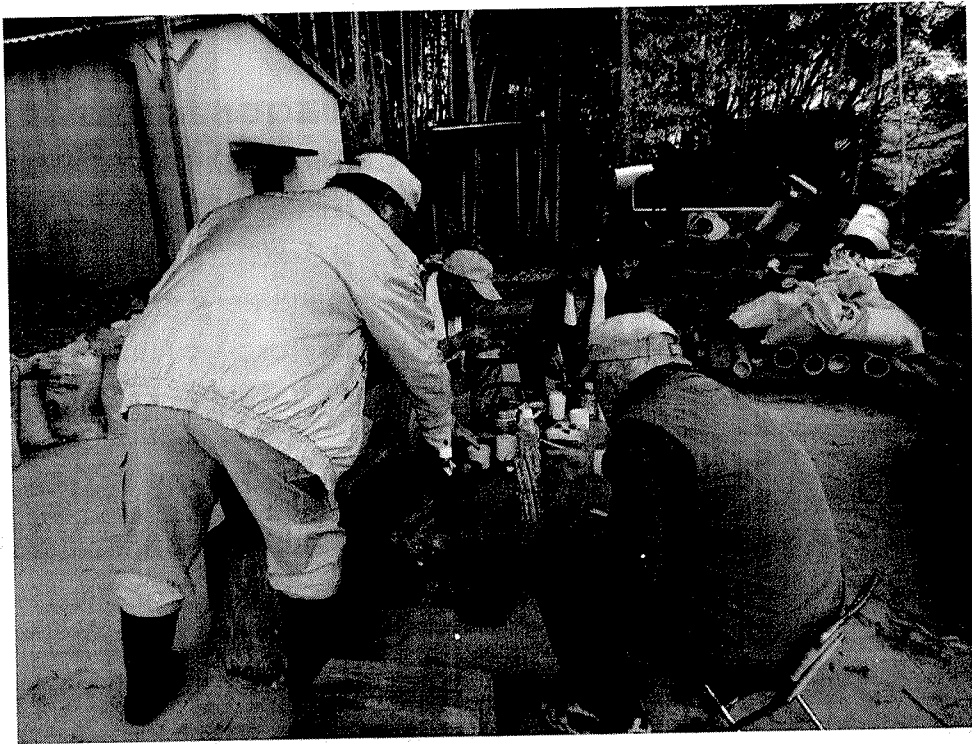


写真-3 活動中に会員が持参した差し入れを囲み雑談している様子



写真-4 毎年年末に行う下関市街地でのミニ門松づくり

3.2.3 現在の萩里山応援隊こもれびの活動内容

図・5 にこもれびが行った竹伐採活動の範囲と現在確認できる竹林の範囲を示す。こもれびの行う竹伐採活動は3月～12月の第二・第四土曜日、9時～15時までである。伐採作業に参加する会員は平均10名で、休憩や雑談も交えながらの作業で、午前中およそ50本の竹を切っている。伐採はすべてノコで行う。切った竹はその場で棚積みにするほか、竹垣の材料として使用している。会員は竹伐採活動で汗をかき、伐採した場所がきれいになることにやりがいを感じている。

こもれびが竹伐採を行う場所は勾配が急な斜面が多いため、伐採後の跡地の利用はしていない。しかし竹伐採を行った場所の中にナンテンやツバキが自生している場所があるため、河田氏はそのあたりにセンリョウを植えたいと考えている。午前の伐採活動が終わると、活動拠点である田床山憩いの広場まで車で10分程度移動し、そこで昼食を取る。昼食時には女性会員が味噌汁を作り、会員が持ち寄りのおかずを持ってくることがあるので、それらを囲みながら雑談をすることが会員の楽しみになっている。午後には会員同士の遊びとして花見やわらび取り、日帰りの温泉旅行を行う。これらの遊びは必ず活動日に行うことにしている、これは会員の他の予定に干渉しないためである。

会員以外の萩市民と共に行う活動としては、竹炭づくりやミニ門松作りがある。竹炭づくりはこもれび竹炭広場で行い、ミニ門松作りは田床山憩いの広場内で行う。参加者は会員の知人に声掛けをするほか、新聞の広報欄に情報を載せることで萩市民に知らせている。さらに、竹垣が必要になった際も同様の呼びかけを行うことで、こもれびと一般参加者と協働で竹垣を製作するイベントを行う(写真・6)。これらのイベントを行う理由としては、こもれびの活動を知ってもらい興味のある人が会に加入すること、竹を利用する人を増やすこと、の2点である。

また、萩市では毎年9月末に萩・竹灯路物語が開催され、こもれびは竹燈籠製作に参加している(写真・7)。来場者にはこもれびが作った竹炭が配布されるが、この配布分の竹炭を竹灯路物語実行委員会より買い取ってもらえるので、その利益がこもれびの活動資金の一部になっている。

3.2.4 萩里山応援隊こもれびから学ぶべき事

萩里山応援隊こもれびから学ぶべき事として、以下の2点が挙げられる。

1. 活動に参加する会員同士の交流の活発さ

こもれびでは、活動中に特製の味噌汁を作る事や、伐採作業を終えた午後の時間で花見・わらび取り・日帰り温泉等の遊びを行なっている。これらの活動を楽しみにしているメンバーも存在する。このことから、活動に参加する会員同士の交流の活発さが見られる。

2. 他の地域の活動を参考にする事

こもれびでは、毎年研修旅行を行っている。この研修旅行は、竹に関する活動を見学する等、こもれびの活動の参考になるものを得るために行っている。また、活動初期には炭焼き方法を学ぶために、佐々並の炭焼きを見学し、そこで得た情報を元に実際に炭焼き釜を作っている。このように、こもれびでは他の活動を参考にしながら活動を行っている。

3.2.5 萩里山応援隊こもれびの課題

こもれびでは、活動初期から6年間、農林事務所の協力を受けながらイベント竹取物語を開催し、竹の利用促進とメンバー集めを行っていた。農林事務所からの協力が無くなり、現在では、

以前に比べてイベントの頻度は低下しているものの、萩市内で行われる萩・竹灯路物語の手伝いを行う事や、年末のミニ門松づくりを行う等、メンバー以外の住民を交えた活動を活発に行っているが活動メンバーに大きな変化は見られない。今後こもれば

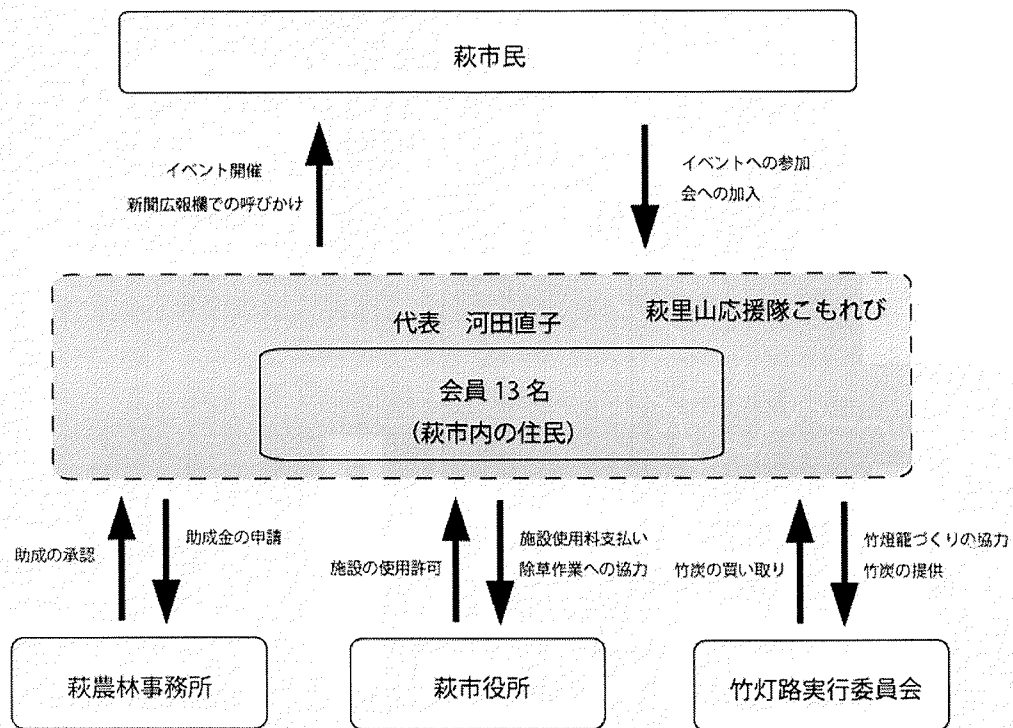
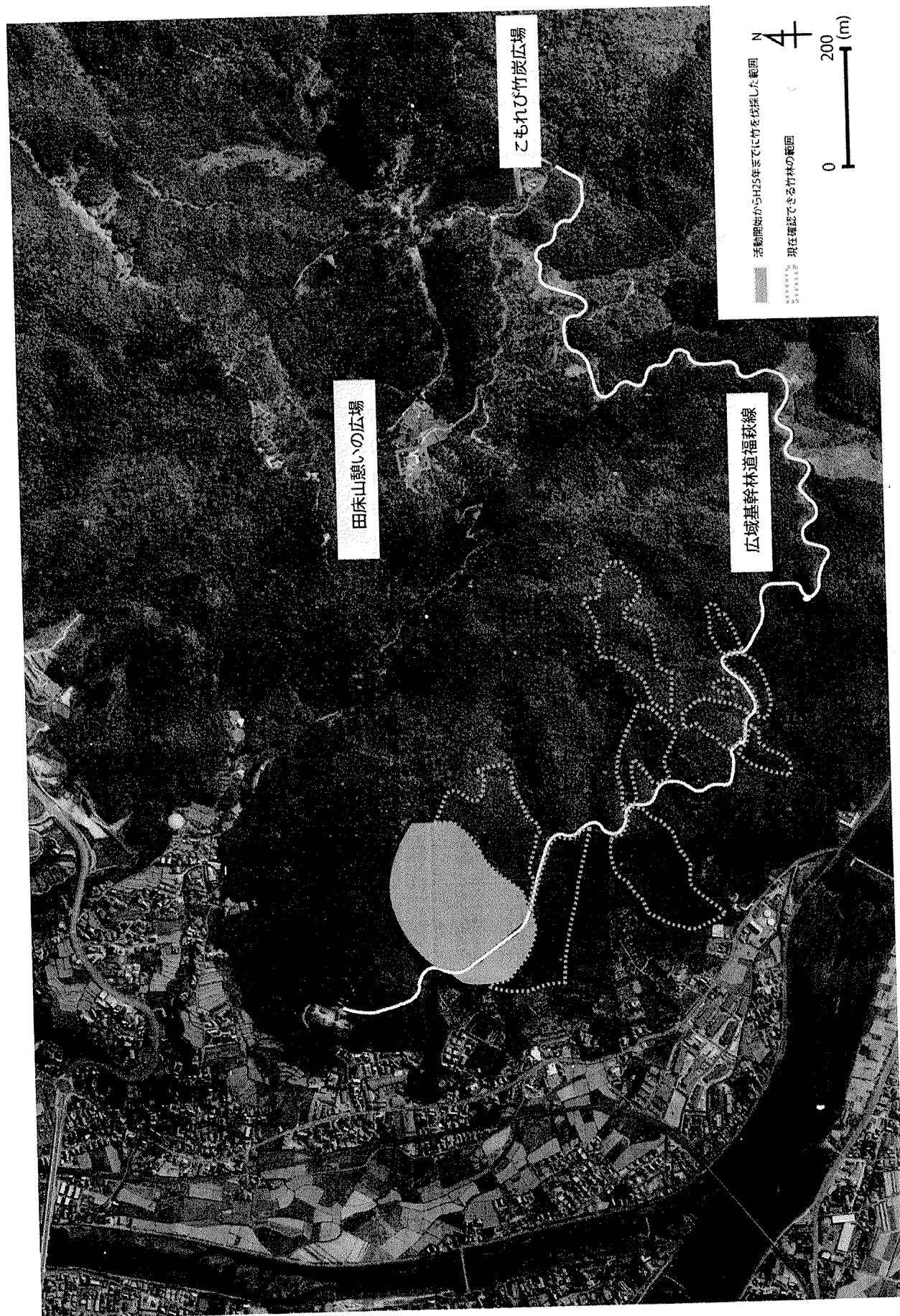


図-4 萩里山応援隊こもればの事業主体図



図・5 こもれびが活動を行う田床山の地図

	活動内容	地域社会と共に行う活動	備考
2000年	農林事務所主催の林業体験の参加者6名で結成 代表 N氏	竹取物語 ・竹炭づくり ・竹垣づくり ・竹箸づくり ・風鈴づくり ・煙籠づくり	140212 こもれびの歩み
2001年			子供が楽しく遊べる山づくり
2002年	こもれび竹炭広場設置		目的の変化
2003年			稲萩線からの竹林景観を良くしたい
2004年			
2005年			活動形態の変化
2006年	市から国床山憩いの広場の使用許可が下りる N氏退会、K氏が代表引継ぎ	竹垣づくり	
2007年		竹炭作り	正月飾りものづくり
2008年			萩・竹灯路物語への参加
2009年		竹垣づくり	
2010年			三門松作り
2011年			
2012年			
2013年			
2014年			

表-3 こもれびの歩み

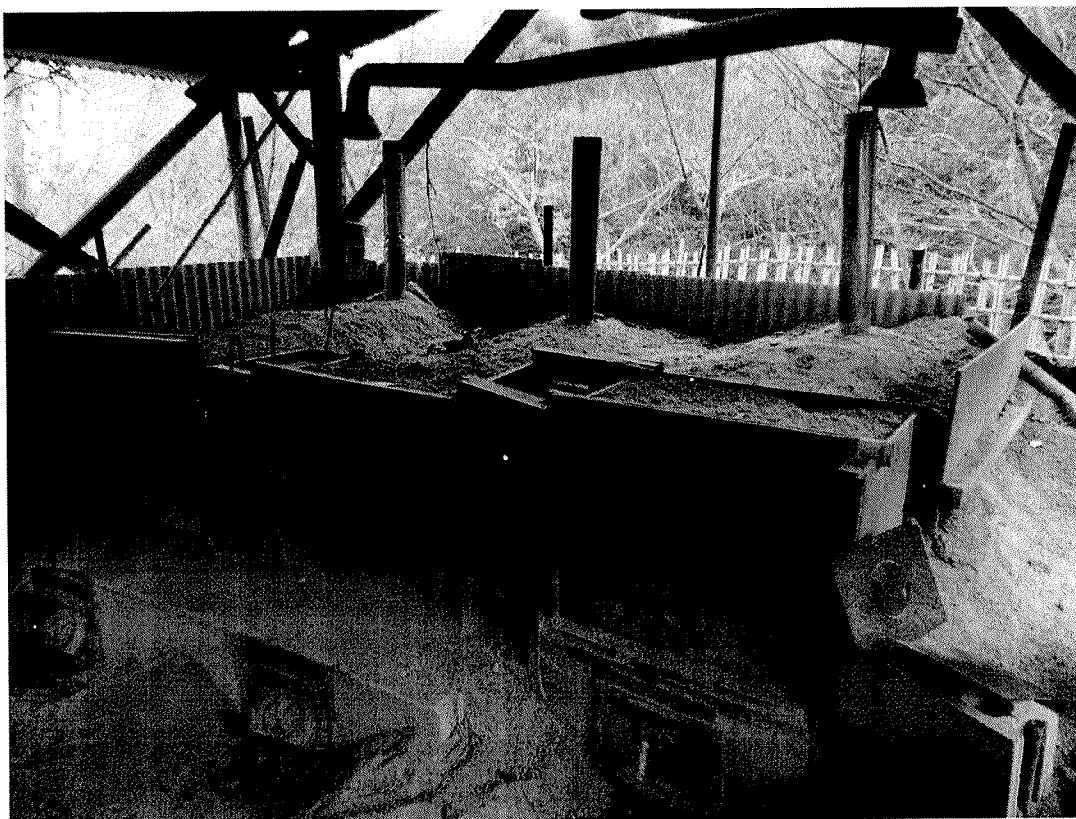


写真-5 会員がこもれび竹炭広場に製作した炭焼き釜

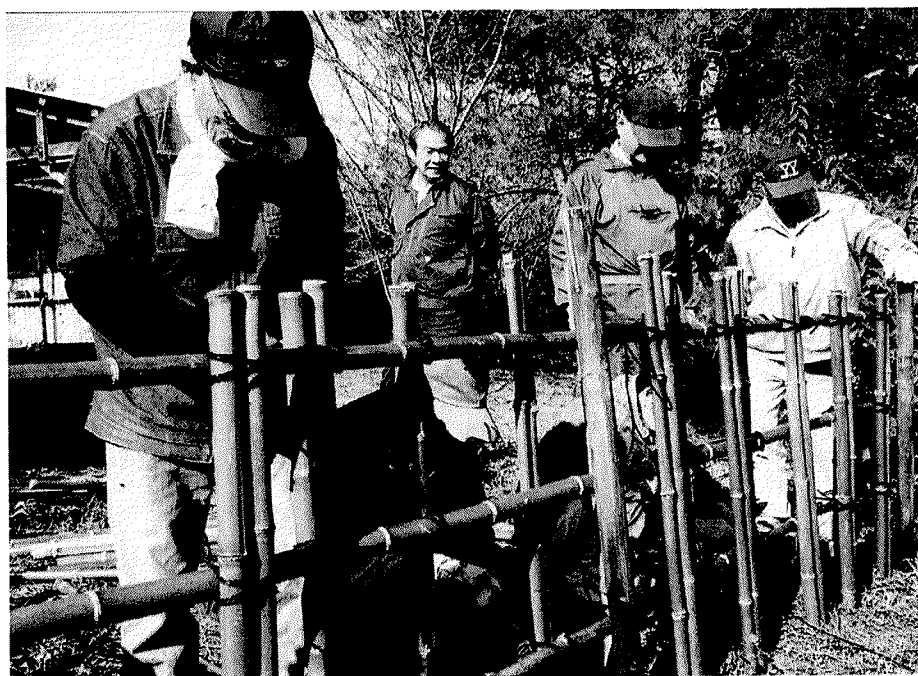
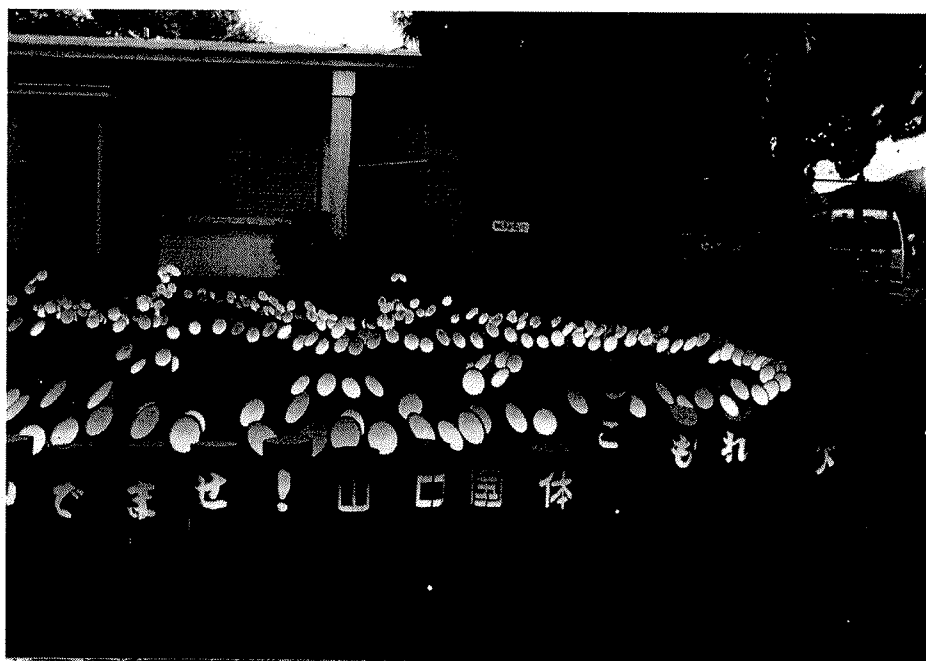


写真-6 住民と協働で行う竹垣づくりの様子

(提供：萩里山応援隊こもれび)



写真・7 萩・竹灯炉物語で使用するためにこもれびの製作した竹燈籠
(提供：萩里山応援隊こもれび)

3.3 山口県周南市鼓南地区「鼓南なんでもやろう会」

3.3.1 鼓南なんでもやろう会の基礎情報

鼓南なんでもやろう会は、2000年（平成12年）に設立され、山口県周南市鼓南地区で住みよい地域づくりと地域の連帯意識を深める事を目的に竹伐採活動を行う市民団体である(図-6)。現在の会員数は26名で、鼓南地区の住民25名と下松市の住民1名で構成される。会員の平均年齢は72歳である。年会費は集めていない。鼓南地区の社会福祉協議会からの補助金・会で製作した竹炭や竹ぼうきを地区の夏祭りで販売した売り上げ・周南市役所から依頼される太華山の清掃活動の謝礼金の計約18万円を資金としている。この資金は、竹伐採活動に使用するチェーンソー・ノコなどの道具の維持費、竹炭釜の修理費、活動中の飲食費に使用している。

3.3.2 鼓南なんでもやろう会の発足と歩み

表-4に鼓南何でもやろう会の歩みを示す。2000年に、市議会議員のA氏が、交付金を使い竹炭窯を作って荒れた竹林を綺麗にしながら竹炭をやこうと考え、大島・杵島自治会長から地域住民に声掛けを行い、鼓南地区の40名の住民が集まり鼓南なんでもやろう会を結成した。結成当時代表を務めたH氏が鼓南なんでもやろう会の活動形態を確立し、竹の伐採と炭焼きを主な活動として地域の手伝いをする市民団体となった。現在もこの活動形態に大きな変化はない。鼓南地区の夏祭り・文化祭の会場設営の手伝いは会の設立当時より行っており、会が製作した竹炭・竹ぼうき・竹細工を販売している。周南市役所から太華山の草刈りを依頼され、毎年会員の4～5名で作業している。2011年には鼓南地区の白鳩学園の文化祭の焼き芋づくりを手伝い、翌年からは芋作りを会で行うことになった。2012年に鼓南地区の大島小学校が閉会し、初期より行っていた小学生の登校の見守り活動が無くなった。

3.3.3 現在の鼓南なんでもやろう会の活動内容

図-7に鼓南なんでもやろう会がこれまでに竹を伐採した範囲と現在確認できる残存の竹林を示す。鼓南何でもやろう会が実施する竹の伐採活動は会員のみで行っており、毎年約3回伐採している。真夏の暑い日や、冬の寒い日は休会する。活動時間は毎回約8時間、作業に参加する会員はおよそ10名で一回当たりおよそ40本の竹を切っている(写真-8)。伐採時はチェーンソーを用いて伐竹・玉切りを行い、玉切りした竹を炭焼きスペースまで運ぶ(写真-9)。作業の休憩時には、会の資金で飲み物や軽食を購入して会員に支給している。

炭焼きは伐採日および他の定例活動日に行い、鼓南なんでもやろう会が所有している炭焼き釜を用いて作っている。1回の炭焼き作業で25～35kgの竹炭を作っている。平成25年には187kgの竹炭を製作した。会結成当時は竹炭を焼く窯を設置し竹炭焼きを行っていたが、周辺住民から匂いの苦情があり、2002年に炭焼き釜を移転させた。

鼓南なんでもやろう会は竹伐採活動以外に、様々な地域の行事に参加をしている。鼓南地区の自治会主催で行われる夏祭り・文化祭に毎年参加し、会場の設営を手伝っている。また、会で製作した竹炭・竹酢液・竹ぼうき・肥料を販売している。2013年は夏祭り・文化祭でそれぞれ8万円の売り上げがあった。毎年周南市役所から太華山の除草作業の依頼があり、会のメンバー約5名で作業にあたっている。鼓南地区の白鳩学園の文化祭で開催する焼き芋イベントのための芋を

会で育て、イベント当日には生徒と共に焼き芋を楽しんでいる。

3.3.4 鼓南なんでもやろう会から学ぶべき事

鼓南なんでもやろう会から学ぶべき事として、以下の3点が考えられる。

1. 活動初期で会の活動形態を確立させたリーダーの存在

鼓南なんでもやろう会は、鼓南地区の自治会の声掛けで活動が始まった。その時に代表を務めたH氏は、会の大まかな活動内容等を作った。その後会長がK氏に代わっても、活動形態は変化していない。このように、鼓南なんでもやろう会にはH氏のようなリーダーの存在が見られる。

2. 活動に参加する会員同士の交流

鼓南なんでもやろう会では、活動の休憩中に会の資金で購入した軽食や飲料を囲み会員同士で雑談を楽しんでいる。また新年会や忘年会、花見大会などを行い、会員同士での交流に活発さが見られる。

3. 竹の伐採と関連した活動

鼓南なんでもやろう会は、伐採した竹を使い竹炭・竹酢液・竹ぼうきを製作している。またそれらの竹を加工して作ったものは、鼓南地区の夏祭り・文化祭で販売し、売上を会の資金に充てている。

3. 会を維持するための資金集めの仕組み

鼓南なんでもやろう会では、社会福祉協議会より年2万円の助成を受けているほか、伐採した竹を用いた製品を作り、販売することで活動の資金を得ている。また資金は、竹の伐採作業に必要な道具の維持費数万円のほか、活動中の会員の軽食・飲料に利用している。

3.3.5 鼓南なんでもやろう会の課題

鼓南なんでもやろう会はほとんどの会員が鼓南地区の住民である。現在の活動では、地区内の行事に参加しているが、鼓南なんでもやろう会が主催する行事は無いため、鼓南地区以外からの会員が少ないと考えられる。今後活動を続けていくためには、どのように鼓南地区以外の住民を会員として得るかが課題である。

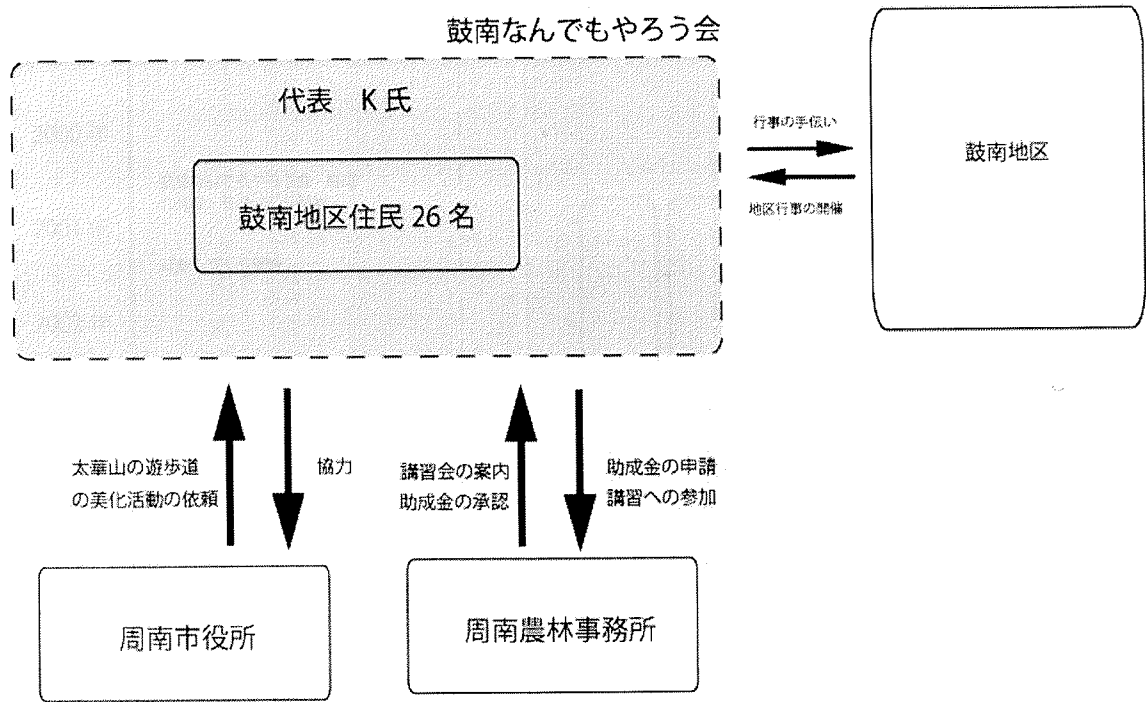


図-6 鼓南なんでもやろう会の事業主体図

	活動内容	地域と共に行う活動	備考
2000 年	鼓南なんでもやろう会 結成 竹伐採・竹炭づくり開始		会長 H 氏
2001 年	ほかしづくり開始		
2002 年			
2003 年		太華山の清掃活動	
2004 年		大島小学校生徒の登校見守り	
2005 年		鼓南地区の夏祭り・文化祭の手伝い	
2006 年			会長が K 氏に変わる。
2007 年			
2008 年			
2009 年			
2010 年			
2011 年			
2012 年		白鳩学園との焼きイモ大会	
2013 年			大島小学校 開校
2014 年			

表-4 鼓南なんでもやろう会の歩み

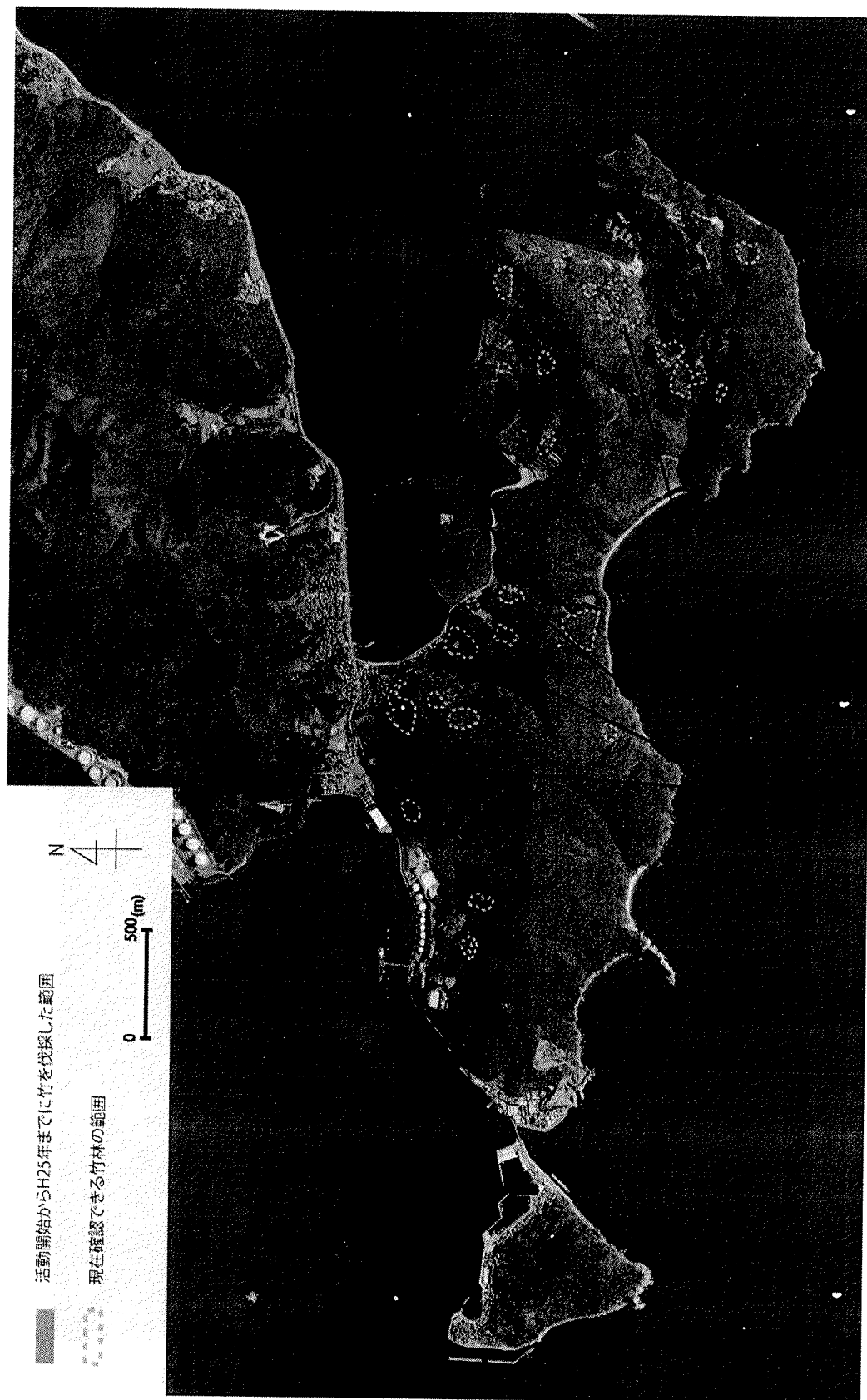


図-7 鼓南なんでもやろう会が行った竹伐採活動の範囲と現在確認できる残存の竹林



写真-8 鼓南なんでもやろう会が竹を伐採している竹林の様子

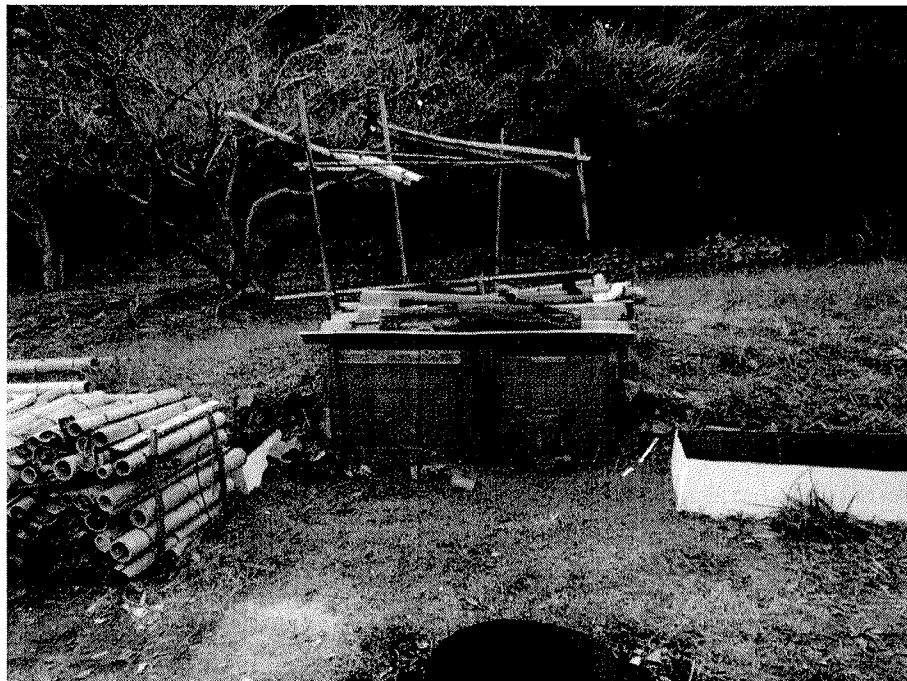


写真-9 鼓南なんでもやろう会で製作した竹炭を焼く窯

3.4 山口県柳井市日積地区「Seeds」

3.4.1 Seeds の基礎情報

Seeds は、2002 年（平成 14 年）に設立され、山口県柳井市日積地区で里山再生と青少年育成を通じた地域活性化を目的に竹伐採活動を行っている住民団体である（図-8）。現在の会員数は 26 名で、日積地区の住民の他に、柳井市伊陸や岩国市由宇町など日積地区周辺の住民で構成される。これらの会員の加入経緯としては、会員からの声掛けで会に加入すること、および後述の各種イベントに参加後、会に興味を持ち加入することである。会員の年齢は 20 代から 60 代である。会費は年間一人当たり 2000 円を集めており、活動時の飲食費に使用している。また道具の維持費等の竹伐採活動に必要な資金は岩国農林事務所からの助成とセブンイレブン・全労済からの助成で賄っている。また農林事務所から森林インストラクターを紹介してもらい、里山づくりの活動の助言を受けている。

3.4.2 Seeds の発足と歩み

表-5 に Seeds の歩みを示す。2002 年に日積地区の大里小学校が日積小学校に統合されることが決定した。その大里小学校の跡地利用を考えるために、声掛けで集まった日積地区の住民 24 名で Seeds を結成した。大里小学校の跡地利用に関して柳井市と協議し、2003 年に跡地の利用許可が下りた。

2003 年より、活動報告や会員の思いを伝えるために Seeds 通信を年 3 回発行する事を始め、現在は日積地区の約 800 世帯に配布している。

活動開始当初は、文化交流会・ふれあい運動会・どんど焼きなど地域活性化を目的として地域住民と共に行うイベントを行っていた。

Seeds は大里小学校跡地を日積地区の活性化の拠点にしようと考え、柳井市内の子供と共に活動を行っていくことを重視した。その上で、2003 年から柳井市と周辺地域の小学生を対象に大里小学校の校舎を宿舎として使用して 1 泊 2 日の里山体験を行うイベント「里山探検隊」を実施した。同時に会員で里山再生の事業の知識・技術を習得するために県が主催する「林業基礎講座」を受講した。その 2 年後より、旧大里小学校跡地の周りの山を地主から借り、「お山の学校」と名付けて、その場所を拠点に子供たちと進める里山再生事業を開始した。この事業は県からの 400 万円の助成を受けており、お山の学校に東屋・炭焼き釜を設置して、また竹林を伐採して跡地に遊歩道を作った。2011 年からは子供たちと進める里山再生事業の続きとして竹伐採跡地にビオトープの造成する事業を開始した。この事業は県から 3 年間、計 60 万円の助成を受けて行った。

2013 年に、Seeds の活動拠点であった大里小学校が解体され、その場所に農村交流施設である「ふれあいどころ 437」が設立された。活動拠点が無くなったことにより Seeds 里山探検隊などのイベント内容が縮小し、また活動日が不定期となった。

3.4.3 現在の Seeds の活動内容

図-9 に Seeds がこれまでに竹を伐採した範囲と現在確認できる残存の竹林を示す。Seeds が実施する竹の伐採活動は会員のみで行う場合と、主に柳井市内の小学生を対象に参加者を募って行う場合がある。Seeds が活動を行う土地は、地主から年間助成金の 1 割分の料金を借りている土地である。雨天の日は安全のために活動していない。会員のみで行う竹伐採活動は、活動日は不定期で会長 N 氏の声かけで活動日を決めている。1 日に 6 時間程度の作業時間で、会員の 6, 7 人で行っている。1 回の活動でおよそ 80 本の竹を伐採する。竹伐採活動は伐竹・玉切りをチェーンソーで行い、伐採した場所に棚積みしている(写真-10)。休憩中には会員が持ってきたおにぎりなどを食べながら雑談をしている。伐採後の竹の処理はその場で腐敗させるか、チップパーを農林事務所から借りて粉碎している。また、柳井市のカワノ工業に竹を提供しており、竹コンクリート漁礁として利用している。竹の伐採以外にも活動場所の下刈り作業も会員で行っている。子供を交えて竹の伐採活動を行う場合は、会員・集まった子供・子供の保護者で活動し、平均 60 名程での作業となる。この時、1 日あたり約 300 本の竹を伐採する。竹伐採跡地では、子供達と共にビオトープ作りを行っている(写真-11)。また季節によって風景が変わるような環境学習の場としての里山を作るために、落葉樹を植樹している。これらの竹伐採活動及び伐採跡地の利用は、地域の子供達が里山づくりなどを自ら行うといった自然体験を通して成長していく事と、子供以外の大人も一緒に参加することで地域の活性化を図ることが目的である。

また Seeds の行う会員以外の住民と共に行う活動としては、先述の子供たちと行う里山再生事業の他に、大里小学校跡地(現在はふれあいどころ 437)で行うどんど焼き・里山探検隊を行っている。参加の募集方法としては、新聞の広報誌に情報を載せる事・柳井市内の小学校への呼びかけ。どんど焼きは毎年日積地区の住民 150 名近くの参加者があるが、農村交流施設ふれあいどころ 437(写真-12)ができたことで柳井市内や岩国市など日積地区以外の地域からの参加者が増えた。

3.4.4 Seeds から学ぶべき事

Seeds から学ぶべき事として、以下の 4 点が考えられる。

1. 竹伐採活動に関連する活動

Seeds では竹伐採活動後の跡地を利用して、子供の環境学習のための里山づくりを行なっている。また、地域の企業と連携して伐採後の竹を有効利用している。これらのことから、Seeds では竹伐採活動に関連する活動がある。

2. 地域との交流活動の活発さ

Seeds では、会員以外の日積地区の住民に対して、年に 3 回の情報誌を発行し、Seeds の活動や会員の思いを共有している。日積地区や周辺地域に呼びかけを行い、里山保全活動やどんど焼きを行っている。このことから、Seeds には地域との交流活動の活発さが見られる。

3. 活動に必要な知識の入手

Seeds では、里山での活動を行うために、会員で林業基礎講座を受講した。また、ビオトープ作りや環境学習の場づくりのために、農林事務所からの紹介の森林インストラクターを活動に取り入れている。このように、Seeds では活動に必要な知識を様々な方法で入手している。

3.4.5 Seeds の課題

Seeds が拠点としていた大里小学校跡地が 2013 年に解体され、農村交流施設「ふれあいどころ 437」が設立された。今後はふれあいどころ 437 とどのような関わり方をするのが課題である。

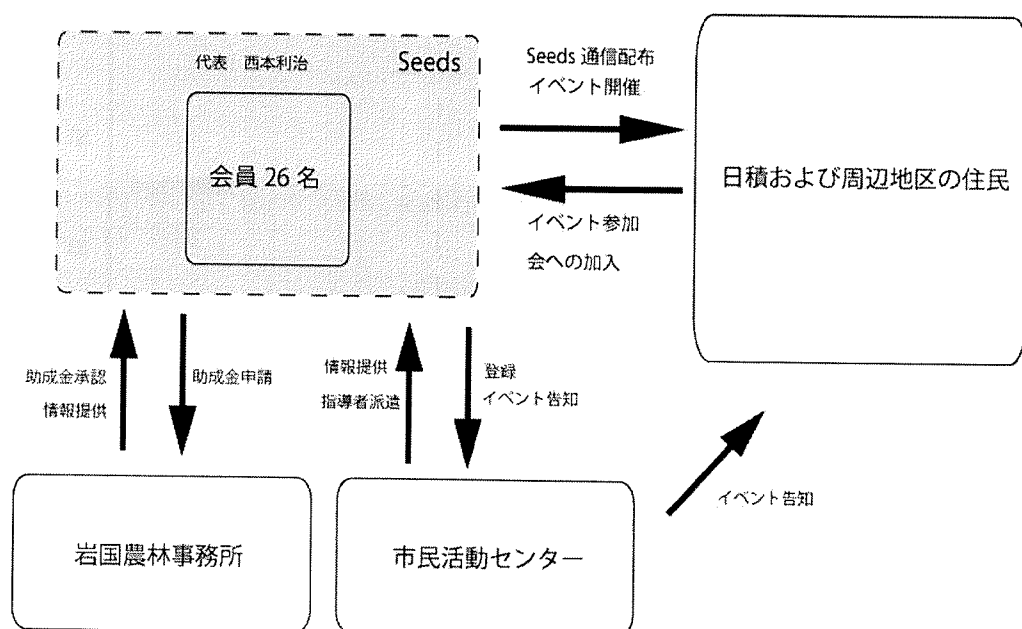


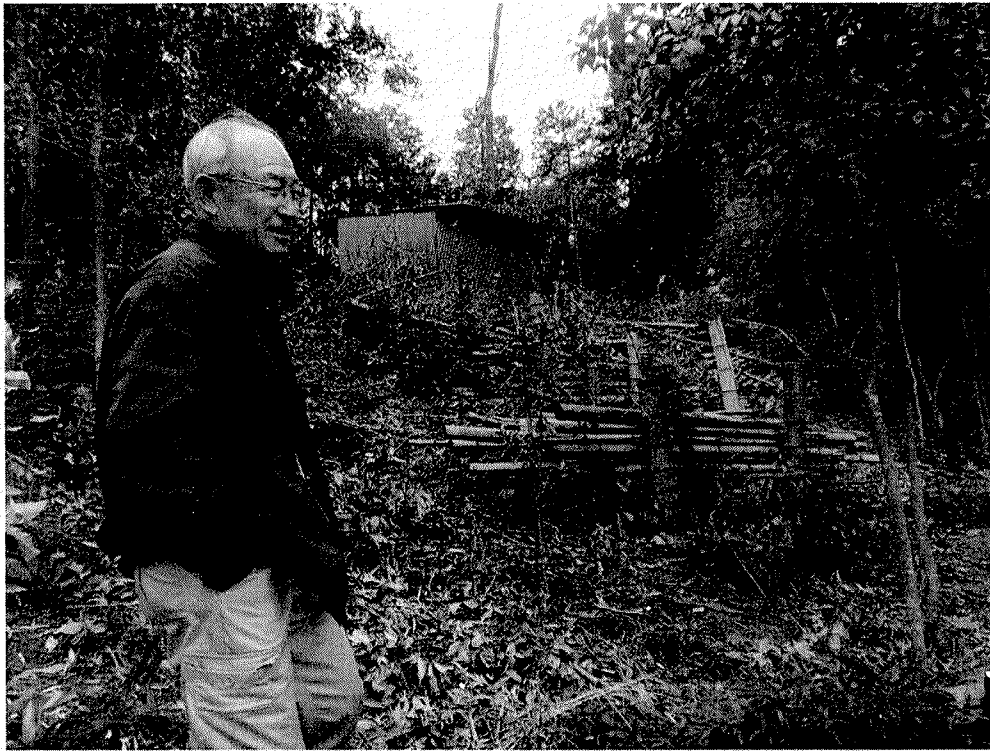
図-8 Seeds の事業主体図

	会内の変化	地域社会と共に行う活動	備考
2002 年	大黒小学校跡地の利用を考える WS Seeds 結成		
2003 年		ふれあい運動会	大黒小学校統合
2004 年			
2005 年		風ん子どんど Seeds 通信発行	
2006 年	お山の学校設立	里山探検隊 子供達と進める里山再生事業	
2007 年			
2008 年			
2009 年			
2010 年			
2011 年		ビオトープ作り	
2012 年			
2013 年	活動が不定期になる		大黒小学校跡地に農村交流施設 「ふれあいどころ 437」設立
2014 年			

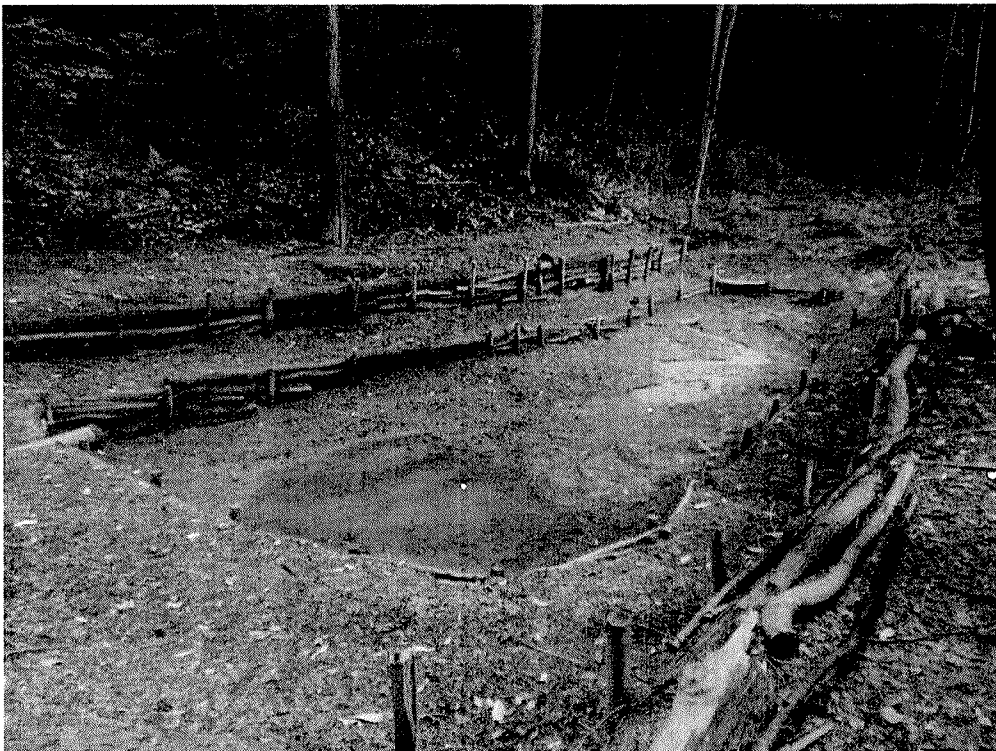
表-5 Seeds の歩み



図-9 Seeds が行った竹伐採活動の範囲と現在確認できる残存の竹林



写真・10 伐採した竹を棚積みになっている様子



写真・11 Seeds が地域の子供と作ったビオトープ

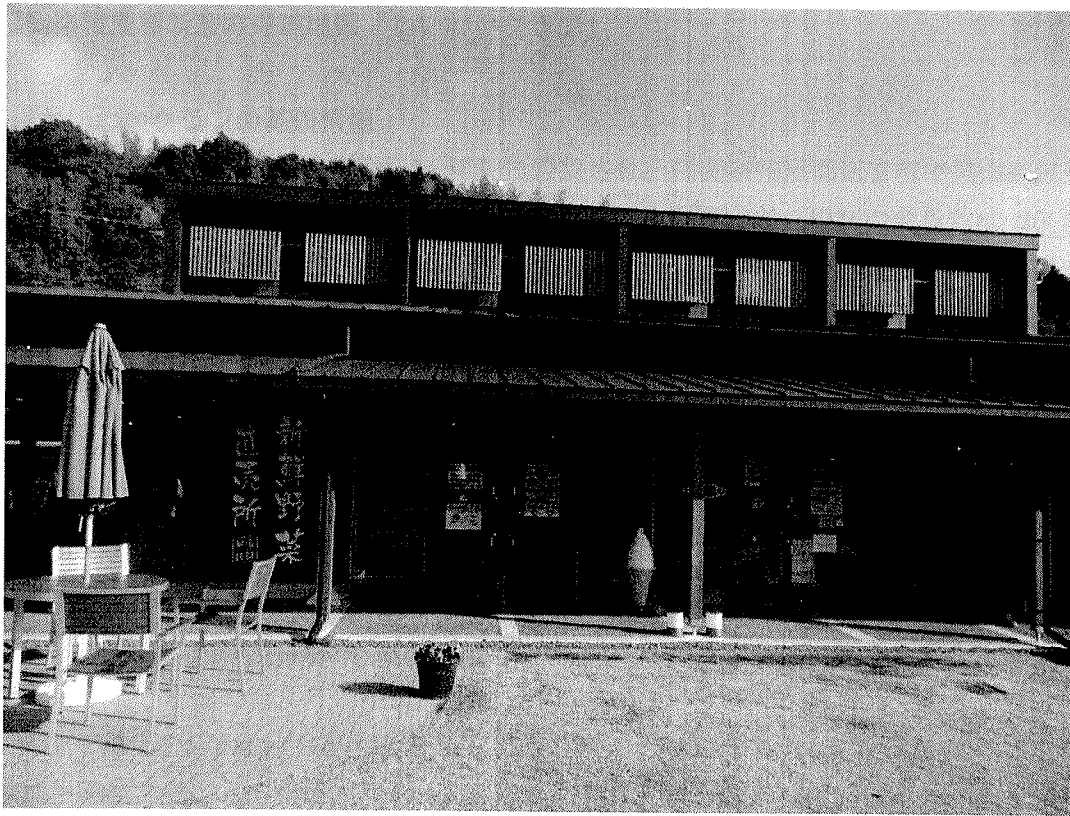


写真-12 大里小学校跡地に作られた農村交流施設「ふれあいどころ 437」

3.5 福岡県糟屋郡新宮町寺浦地区「わいわいクラブ」

3.5.1 わいわいクラブの基礎情報

わいわいクラブは、1999年（平成11年）に設立され、福岡県糟屋郡新宮町で里山の風景を次世代に残すために里山保全活動を行っている住民団体である（図-10）。現在の会員数は20名で、会員は糟屋郡と福岡市東区の住民で構成される。これらの会員の加入経緯としては、会員からの声掛けで会に加入することである。会員の平均年齢はおよそ70歳である。会費は年間一人当たり3000円を集めており、竹伐採や下刈りの活動に必要なチェーンソー・草刈り機の維持費に使用している。また毎年新宮町より年間20万円の助成を受けており、植樹活動の資金として使用している。

3.5.2 わいわいクラブの発足と歩み

表-6にわいわいクラブの歩みを示す。1998年に新宮町でまちづくり委員会が立ち上がった。代表の青山氏は新宮町出身ではなかったが、新宮町に住み始めてからは、海もあり山もある素敵な場所だということを他の新宮町の住民に自覚してほしいという思いからまちづくり委員会に参加した。そこで里山を活かしたまちづくりをしようと考え、1999年5月にわいわいクラブを結成した。結成当時は活動できる場所がなかった。そこで青山氏の知人に相談し、その知人を頼りに活動場所を探し、1999年7月に寺浦地区の土地4000㎡を借りた。当初から、活動の目的は新宮の里山風景を次世代に残していくことであった。そのため、竹の繁殖により損なわれた里山風景を元に戻そうという事で里山の竹の伐採を始め間伐や下刈り、田畑での稲作を行っている。結成当初から現在まで、新宮町で開催される「まつり新宮」に参加し、会員で製作したツル細工や竹細工を販売することや、竹トンボづくりなどの体験講座を開いている。2002年には会員でプレハブ製の事務所を設立し、その場所を拠点としている。

3.5.3 現在のわいわいクラブの活動内容

図-11にわいわいクラブがこれまでに竹を伐採した範囲と現在確認できる残存の竹林を示す。わいわいクラブが実施する竹の伐採活動（写真-13）は会員のみで行っている。竹伐採活動は、8月を除く毎月第二日曜日の13時から17時までである。伐採作業に参加する平均人数は12名で、1日あたり70本程度伐採する。伐採した竹はその場で燃やし処理するか、門松（写真-14）や竹細工の材料として使用している。竹伐採後の跡地では、山の保水力を高めるために毎年広葉樹を植樹している（写真-15）。また、タケノコ林として使用する場所では間伐を行っている。

わいわいクラブの行う会員以外の住民と共に行う活動としては、毎年新宮町で開催される「まつり新宮」に参加することである。この活動は、わいわいクラブ発足当時より参加しており、毎年ツル細工や竹細工を販売している。またこのイベントでは体験型のイベントも行っており、竹トンボ・リース・カゴなどを参加者と共に行っている（写真-16）。

3.5.4 わいわいクラブから学ぶべき事

わいわいクラブから学ぶべき事として、以下の2点が考えられる。

1. 竹伐採活動に関連する活動

わいわいクラブでは、竹伐採後の竹を竹細工として使用することや、竹伐採後の跡地に植樹するなど、竹伐採に関連した活動が行われている。

2. 資金運用の仕組み

わいわいクラブでは、竹伐採等の活動に必要な道具の維持費や購入費を会費や助成金、まつり新宮での収入で賄っている。活動を継続的に行うための資金運用の仕組みがある。

3.5.5 わいわいクラブの課題

わいわいクラブは、現在糟屋郡と福岡市東区の住民で活動を行っている。今後は活動の輪を広げる為にも、福岡市内の住民にどのようにアプローチをしていくかが課題となる。

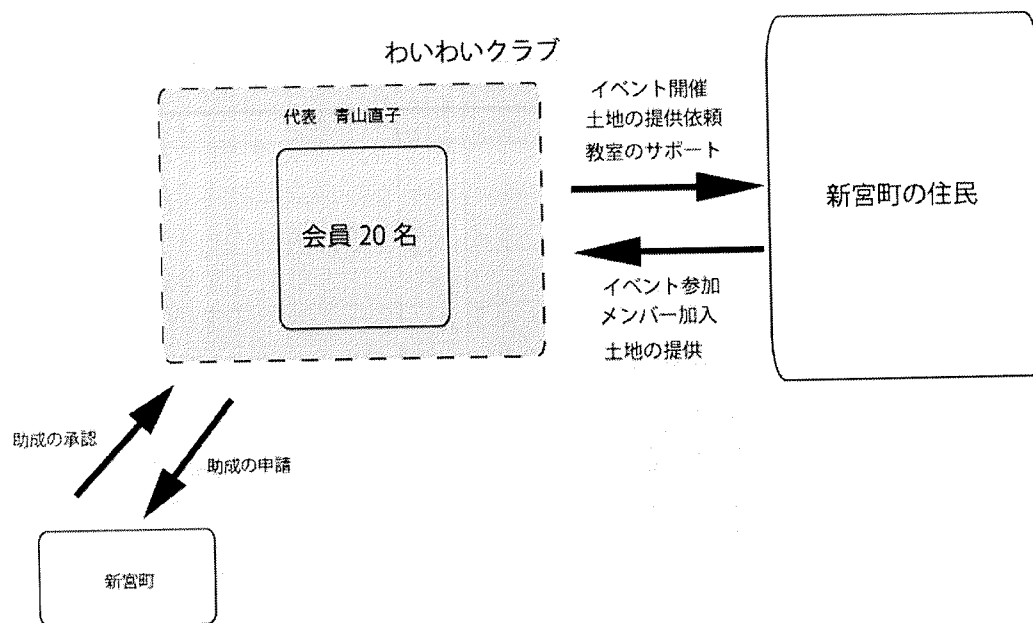


図-10 わいわいクラブの事業主体図

	会内の変化	地域社会と共に行う活動	備考
1999 年			
2000 年			
2001 年			
2002 年	事務所の設立		
2003 年	ログハウスの製作		
2004 年	古民家再生事業の開始	わいわい自然塾	
2005 年		お正月飾り教室	
2006 年		まつり新宮への参加	
2007 年			
2008 年			
2009 年			
2010 年			
2011 年			
2012 年			
2013 年			
2014 年			

表-6 わいわいクラブの歩み



図・11 わいわいクラブが行った竹伐採活動の範囲と現在確認できる残存の竹林



写真-13 わいわいクラブが行う竹伐採活動

(提供：わいわいクラブ)



写真-14 わいわいクラブが製作した門松

(提供：わいわいクラブ)



写真-15 竹伐採後の跡地に植樹をする準備をしているメンバー
(提供：わいわいクラブ)



写真-16 まつり新宮で体験教室を行うわいわいクラブ
(提供：わいわいクラブ)

3.6 佐賀県三養基郡基山町園部地区「かいろう基山」

3.6.1 かいろう基山の基礎情報

かいろう基山は2004年（平成16年）に設立された、佐賀県三養基郡基山町園部地区で里山再生と地域社会への貢献を目的に活動を行う団体である（図12）。基山町は森林面積約841haであるが、そのうち約650haが竹林に覆われている。かいろう基山の会員数は53名、平均年齢は72歳、会費は年間1人当たり2000円で、道具の維持費などの活動資金に充てられている。会員のうち35名は基山町の住民であるが、8名は鳥栖市・佐賀市など佐賀県内、10名は小郡・久留米・春日など福岡県内の住民で構成される。活動のモットーは「森を守ろう、人を守ろう、地球を守ろう」である。また、行政と企業から年間150万円の助成を受けて事業を行っている（表7）。この助成金は主に竹を伐採する道具の購入に使われている。また会の維持管理費には会費を使っている。

3.6.2 かいろう基山の発足と歩み

表-8にかいろう基山の歩みを示す。かいろう基山は、自衛隊OBで構成された団体“隊友会基山支部”の会員12名と国鉄OB1名の13名で立ち上げられた。彼らには、定年後でもまだ元気でいて社会の役に立ちたいという思いがあった。何か活動できることはないかと探していたところ、基山町の山が竹で荒れていることに会長の平峯氏が気づいた。かいろう（快労・快老）を目的に「竹を切り、竹炭でも作りながら楽しく活動しよう」という事で園部地区の竹林を地主から貸してもらい竹の伐採を始めた。

活動開始から5年目に、作業の人員不足・会員の高齢化が理由で閉会の危機に直面した。しかし、森づくりに興味があった松原氏（ヒアリング対象者）が知人からの紹介でかいろう基山に加入した。そして松原氏が会員に向けたブログを書くことや、園部地区の将来像を提唱して松原氏の意識を他の会員と共有することで会員の士気を高めることでかいろう基山は閉会の危機を免れた。

3.6.3 現在のかいろう基山の活動内容

かいろう基山が実施する竹の伐採活動は季節によらず毎週火曜日から土曜日までの午前中8:30から11:30である。伐採活動に参加する平均人数は11名である。活動に無理のない作業量として1日1人当たりおよそ3本の竹を切り、玉切り・枝払い・整理を行う。”かいろう基山”が竹伐採活動を行っている土地は、園部地区の林家から借りている竹林および園部地区の竹林を持っている会員の竹林である。図13にかいろう基山がこれまでに竹を伐採した範囲と現在確認できる残存の竹林の位置を示す。竹の伐採箇所は年度毎に計画を立てて決めており、毎年約3000㎡の竹を伐採することを目標としている。竹伐採時は基本的にノコとロープを用いて伐採しており、作業中は安全のためにヘルメットを着用して行う。作業をする会員は、山をきれいにしてお子たちに残したいという思いで活動に参加している。また、毎日竹伐採に参加して体を動かすことにより、自分の健康維持になり、尚且つ地域の役に立っていることがやりがいになっている。

これらの定例活動以外に、会員の知人やイベント開催のパンフレットを配布することで会員以外の地域住民に呼びかけを行い、かいろう基山と地域住民で竹を伐採する竹切りイベントを年4

回開催し、毎回基山町・みやき町から 20～30 名の参加者がある。

竹伐採後の土地では、平成 20 年から毎年 2 月に植樹祭を行っている。土砂災害の予防と水源涵養機能の回復を目的にカシ・クス・シイ・ヤマモモ・ヤマザクラを基山町・みやき町の住民と共に植樹している。また竹伐採活動を行った場所は太陽光が入り雑草が生えてくるので、そのための下刈りも呼びかけで集まった住民と共に毎年 6 月と 9 月に行っている。

伐採した竹は、粉碎機を使い竹パウダーにすることや会員で作った炭窯を使い竹炭・竹酢液に加工している。竹パウダーからは乳酸菌を作り、会員がシャンプーの代用に使用することやヨーグルトをつくるなど、日常の生活に使用することを試みている。ヒアリングさせていただいた松原氏は乳酸菌をシャンプー・ボディーソープ・歯磨き粉として使用されており、体に垢が溜まらないなどの効果が出たそうだ。竹炭・竹酢液は基山町や鳥栖市のバザーで販売も行っている。また会員に興味で竹細工を作る人がおられ、伐採後の竹を持ち帰り、個人で竹細工を作られている。

かいろう基山は、森に興味を持つ人を増やすという目的で 1 年間の育林市民力養成講座を月に 1 度行っている。この講座には毎年 10～25 名の受講生がある。内容は、森林内で安全に作業する方法と伐竹から植樹までの里山保全活動についてである。講座を卒業した人は、森林ボランティアリーダーの資格を得て、かいろう基山の竹切りイベントや植樹祭の際に一般参加者のアシスタントとして活躍する。また、毎年卒業生の一部がかいろう基山の会員になる。こうした取り組みは、森に興味を持つ人を増やすことで、自分たちの手で地域の里山を再生できる仕組みを作るために行っている。

3.6.4 かいろう基山が考える園部地区の将来構想

かいろう基山は、園部地区に対し図 14 のような目標がある。

第一に、災害に強い里山にすることである。現在、園部地区の斜面に生えている竹をすべて伐採し、そこへカシ・クス・シイ・ヤマモモ・ヤマザクラを植樹することで土砂災害の発生しにくい里山にすることを目標にしている。

第二に、資源としての竹の利用システムの構築である。伐採した竹を竹炭・竹酢液・竹パウダーに加工する工場を図 3 の工場マークの位置に設立し、生産されたこれらの製品を園部地区の農畜産業に使用し、農畜産物の地域ブランド化を目標としている。平成 25 年に三ツ瀬の養鶏農家に竹パウダーを飼料として使用してもらったが、顕著な結果が出なかったようである。また県に飼料としての竹パウダーの効果を測る試験を依頼したが良い返答が得られなかったので、かいろう基山で試みようと考えておられる。また斜面に生えた竹をすべて伐採し終えた後、図 3 の竹マークの場所で新たに平地に竹を植えることで、資源としての竹の供給場所・タケノコ林として活用することを目標にしている。

第三に、近郊都市の住民を呼び込む仕組みづくりである。図 3 の「クラインガルテンの里」と書かれた場所に福岡市民をターゲットにした農園や宿泊施設を作ること、休日は園部地区に宿泊してもらい、里山保全の活動や農作業を体験できる仕組みを作ること都市住民を巻き込んだ地域活性化を図るという構想を持っておられる。

3.6.5 かいろう基山から学ぶべき事

かいろう基山から学ぶべき事として、以下の 6 点が考えられる。

1. 会に活力を与える存在

松原氏が加入する前のかいろう基山は、会員の高齢化、作業人数の少なさで閉会の危機にあったが、松原氏が加入して、ブログを書くことで会員の士気を高めることや、一般参加者と共に行う活動が増えかいろう基山の活動を知ってもらう機会が増えた事、園部地区の将来像を会員と共有し、明確な活動目的を作った。このことから、松原氏の存在がかいろう基山の活動を継続させていると言える。

2. 会員の多様な知識を生かす工夫

かいろう基山の会員は、それぞれ多種多様な職業に就かれていた人達である。溶接工を退職された会員の方がドラム缶で炭焼き釜を作ったこと、建築の知識を持つ人が拠点である「かいろうの館」を建設したなど、会員が持つ伐採活動以外の多彩な知識も活動の中で活用している。

3. 会の活動に参加する人を集める工夫

かいろう基山に参加する人の加入方法として、知人に声掛け、鳥栖や基山町など園部地区の周辺で行われるバザーに参加し呼びかけを行う事、周辺都市の行政が出す広報誌にて案内することで会員の募集をしている。これにより会員が53名になっていることから、会の活動に参加する人を集める工夫が活動の継続要因となっていると言える。

4. 会を維持するための資金集めの方法

かいろう基山は、行政や企業から助成金を受け活動している。この助成金は、竹伐採活動に使用している。また、会の維持管理費には会費や竹を加工した商品の売り上げで賄っている。このことから、利用目的の違う経費に必要な資金集めの方法が活動の継続要因となっていると言える。

5. 竹の伐採と関連した活動

竹伐採活動をすることで得られた竹を竹パウダーや竹炭に加工し活用することや、伐採後の跡地で植樹祭を行っている。このように竹の伐採だけでなく、その後に竹の利用や竹伐採後の跡地の利用法があることで、伐採活動を行う意味を作っていることが竹伐採活動の継続要因となっていると言える。

6. 会の雰囲気

かいろう基山の活動は、火曜日～土曜日の午前中であるが、この活動日を会員に強制させることはない。そのため会員は私用を優先させることができる。しかし、ほぼ毎日活動に参加する会員も10名いて、この会員らは会員同士の交流に楽しみを感じている。また、炭焼き体験に参加したことを機にかいろう基山に加入した会員によると、会の結束力・指導力に感銘を受け入会したとおっしゃった。このことから、会の雰囲気が活動の継続要因だと言える。

3.6.6 かいろう基山の課題

基山町は福岡市から車で30分の場所に立地する里山である。かいろう基山の将来構想にもあるように、どのように福岡市の住民を巻き込んでいくかが今後の課題である。

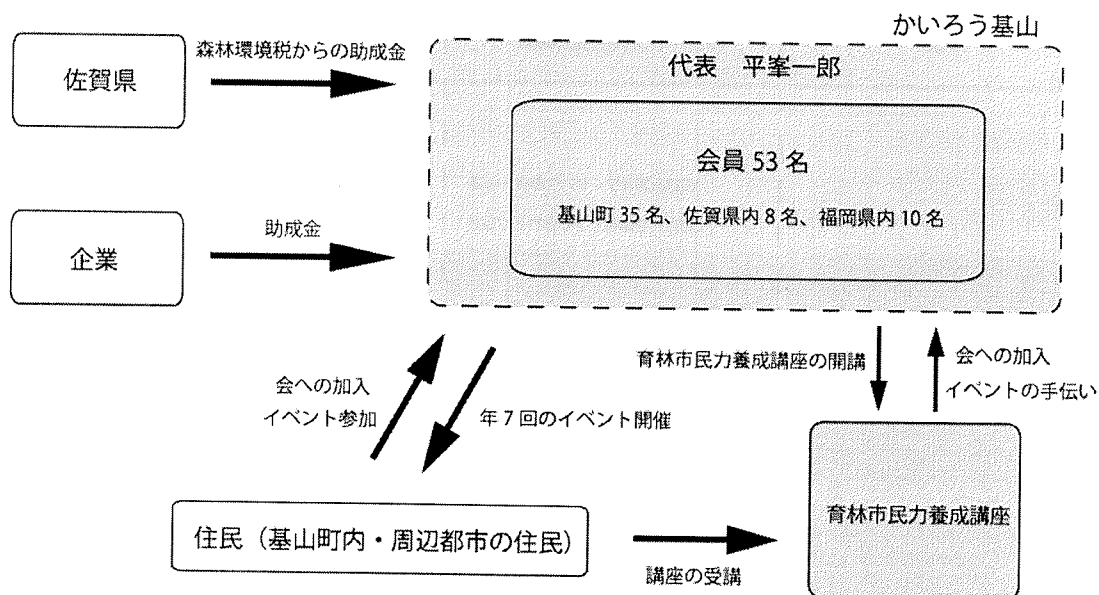


図-12 かいろう基山の事業主体図

●行政から助成を受けて行う事業

20 年度～	県民参加の森林づくり事業
21 年度～23 年度	焔博記念地域活性化事業
21 年度～23 年度	基山町まちづくり基金事業
25 年度～27 年度	森林・山村多面的機能発揮対策事業

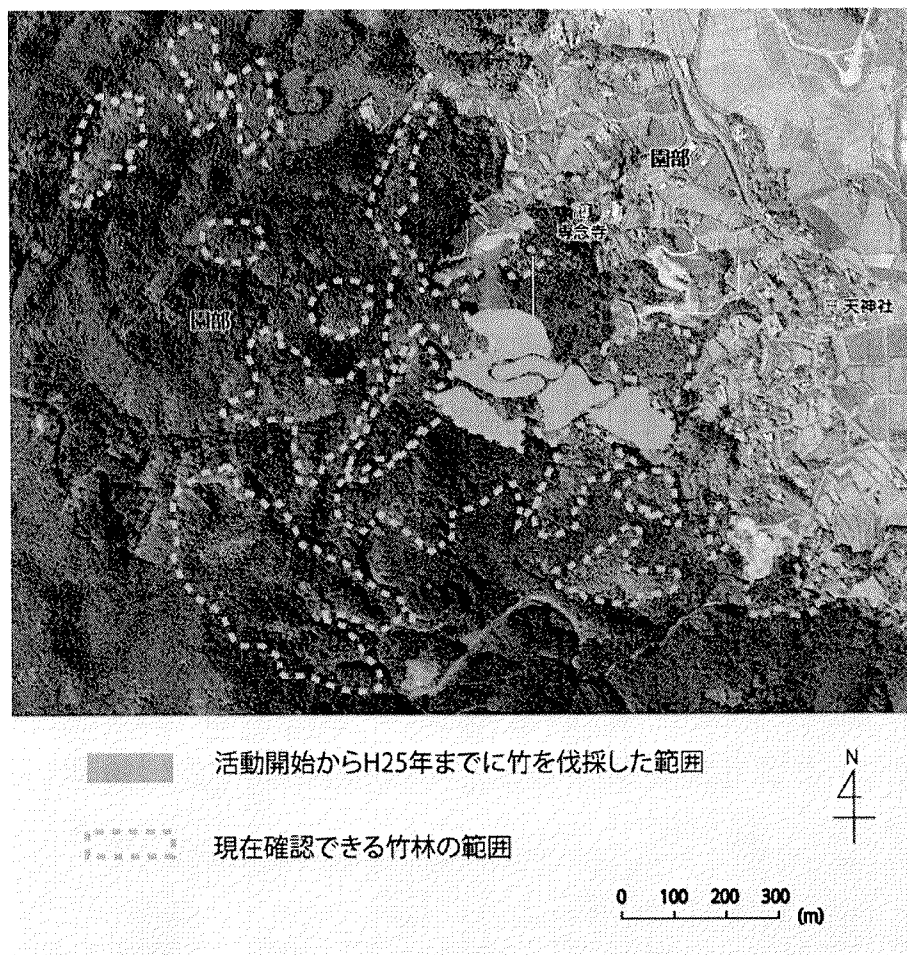
●企業からの助成を受けて行う事業

22 年度	久光製薬活動助成
24 年度～26 年度	セブン-イレブン記念財団の自立事業助成

表-7 行政・企業から助成を受けて行う事業

	活動内容	地域社会と共に行う活動	備考																				
2004年																							
1月	自衛隊OB12名と国鉄OB1名で いるう基山発足	基山・鳥栖のバザーで竹製品販売																					
12月	NPO法人化	校区から門松づくりの講習の依頼																					
2005年																							
2006年																							
	かいろうの館（拠点）完成																						
2007年																							
2008年																							
2009年		橘樹祭開始 ブログ開設	かいろう基山開会の危機 松原さん加入																				
2010年		青林市民力養成講座開講 ブログ執筆開始																					
2011年		森林ボランティアリーダーの 育成により、イベント時に一 般参加者に同伴するアシスタ ントの数を増やす事ができ た。	青林市民力養成講座受講生																				
2012年	竹パウダー製作のための機械購入	竹切り体験イベント開始 下刈り体験イベント	<table><tr><th></th><th>受講生</th></tr><tr><td>1期生</td><td>1年目 10→15名 2年目 15→14名</td></tr><tr><td>2期生</td><td>1年目 15→16名 2年目 13→12名</td></tr><tr><td>3期生</td><td>1年目 9→11名 2年目 11→10名</td></tr><tr><td>4期生</td><td>1年目 2→25名 2年目 8→ 名</td></tr></table>		受講生	1期生	1年目 10→15名 2年目 15→14名	2期生	1年目 15→16名 2年目 13→12名	3期生	1年目 9→11名 2年目 11→10名	4期生	1年目 2→25名 2年目 8→ 名										
	受講生																						
1期生	1年目 10→15名 2年目 15→14名																						
2期生	1年目 15→16名 2年目 13→12名																						
3期生	1年目 9→11名 2年目 11→10名																						
4期生	1年目 2→25名 2年目 8→ 名																						
2013年			橘樹祭参加者																				
2014年			<table><tr><th>年度</th><th>会員</th><th>一般参加</th><th>計</th></tr><tr><td>20年度</td><td>25名</td><td>75名</td><td>100名</td></tr><tr><td>21年度</td><td>27名</td><td>76名</td><td>101名</td></tr><tr><td>22年度</td><td>30名</td><td>86名</td><td>116名</td></tr><tr><td>23年度</td><td>23名</td><td>44名</td><td>67名</td></tr></table>	年度	会員	一般参加	計	20年度	25名	75名	100名	21年度	27名	76名	101名	22年度	30名	86名	116名	23年度	23名	44名	67名
年度	会員	一般参加	計																				
20年度	25名	75名	100名																				
21年度	27名	76名	101名																				
22年度	30名	86名	116名																				
23年度	23名	44名	67名																				

表-8 かいろう基山の歩み



図・13 かいろう基山が竹伐採活動を行った範囲と残存する竹林

園部地区地域活性化概念図



図-14 かいろう基山の園部地区地域活性化概念図

(提供：かいろう基山)

.....

第4章 考察

第3章のケーススタディより、里山における住民主体の竹伐採活動は、調査を行った各団体それぞれが異なる取り組みを行っていることが明らかとなった。本章では、10年以上活動を行う各団体を活動内容と組織形態に着目し、比較分析を行う事で考察を行った（表-9）。

4.1 各団体の竹伐採活動に関連した会員同士での交流活動の活発さ

かぐや姫の里づくりの会では、竹伐採活動の休憩中に会のメンバーが持ち寄った食べ物を囲み、雑談を楽しんでいる。萩里山応援隊こもればは、活動日の午前中に竹伐採活動を行い、午後には、花見・わらび取り・日帰り温泉旅行などの遊びを会員同士で楽しんでいる。また年に1回研修旅行を行っている。鼓南なんでもやろう会では、活動の休憩中に会より軽食が支給され、会員はそれを囲みながら雑談を楽しんでいる。Seeds では打ち合わせや反省会などを行う際に、会員同士の情報交換会を行っている。わいわいクラブでは2002年に会員で建てたログハウスで飲み会を行うことや、会員で研修旅行に行っている。かいろう基山では、活動の休憩中にかいろうの館で雑談を楽しむことや、会員の活動中の様子をブログで発信し、会員の士気を高めることを行っている。

以上のことから、本研究で対象とした10年以上活動を行う団体には、竹伐採活動に関連した会員同士での交流活動の活発さがあり、それらが会員が活動に参加する動機に繋がっていることにより、竹伐採活動の継続要因であると考えられる。

4.2 各団体が行う竹伐採活動の適当な作業量

かぐや姫の里づくりの会では、季節によらず第一土曜日と第三土曜日の 8:30 から 15:00 までを活動日時として、平均 7 名で作業を行い、一日あたり約 100 本の竹を伐採している。萩里山応援隊こもれびでは、3 月～12 月の第二・第四土曜日の 9 時から 15 時までを活動日時として、平均 10 名で作業を行い、一日あたり約 50 本の竹を伐採している。鼓南なんでもやろう会では、年に 3 回程度の伐採活動で、一回約 8 時間の作業を平均 10 名で行い、一日あたり約 40 本の竹を切っている。Seeds では、活動日は不定期だが、6 時間の作業時間で行っており、7 名程度の会員で約 80 本の竹を伐採している。わいわいクラブでは、8 月を除く毎月第二日曜日の 13 時から 17 時までを活動日時として、平均 12 名で一日あたり約 70 本の竹を伐採している。かいろう基山では、季節によらず毎週火曜日から土曜日の 8:30 から 11:30 までを活動日時として、平均 11 名で作業を行い、一日あたり約 30 本の竹を伐採している。

これらの調査結果を比較すると、各団体で一日の作業量が違うことが言える。この違いは作業時のチェーンソーの本数や会員の年齢等も影響していると考えられるが、各団体が 10 年以上の活動での経験から、それぞれの団体での無理のない作業量だと考えられる。

以上のことから、本研究で対象とした 10 年以上継続して活動を行う団体の竹伐採作業は、それぞれ作業量が異なるが、各団体で無理のない作業を行っていることが活動の継続要因となつてい

4.3 竹伐採活動に関連した活動の存在

かぐや姫の里づくりの会では、伐採した竹をミニ門松やそうめん流しに利用することや、伐採後の跡地をタケノコ堀り・竹林コンサートの会場として活用しており、王喜地区や周辺の地域の住民と交流を行い、ミニ門松については販売後の収益が活動資金となっている。萩里山応援隊こもれびでは、伐採後の竹をつかって竹炭づくり・竹垣づくりや竹燈籠として活用し、萩市民との交流を行っている。鼓南なんでもやろう会では、伐採後の竹を使用して竹炭・竹酢液・竹ぼうきを作っており、これらを鼓南地区の行事で販売することで収益を活動資金に充てている。Seedsでは、伐採後の竹林跡地を、柳井市内の子供たちの環境学習の場とするために、子供たちを交えたビオトープ作りや植樹活動を行う空間として活用している。わいわいクラブでは、伐採後の竹を竹トンボや門松として利用し、新宮町のイベントで販売や体験教室を行い、地域住民との交流を図っている。また竹伐採後の跡地では植樹活動を行い、美しい里山の風景づくりを目指している。かいろう基山では、伐採後の竹を竹炭や竹細工・竹パウダーとして使用しており、基山町と周辺地域の住民の交流を図るだけでなく、会員自らが健康のために使用している。また伐採後の跡地は基山町および周辺地域の住民と共に行う植樹活動の空間として活用している。またかいろう基山には竹を利用した基山町園部地区の地域活性化構想がある。

これらの団体は竹伐採活動によって生まれた竹や跡地に利用目的を持っていることが分かる。このことから、竹や竹伐採跡地を活用することが竹を伐採する目的の一つとなっていると考えられる。

以上のことから、本研究で対象とした10年以上活動を行う団体の竹伐採活動には、伐採後の竹の利用や竹伐採跡地を利用するなどの竹伐採活動に関連する活動があり、それら竹伐採活動に関連する活動が竹伐採活動の継続要因となっていると考えられる。

4.4 一般参加者を交えたイベントの開催

かぐや姫の里づくりの会では、里山交流体験会として、タケノコ掘り・そうめん流し・竹林コンサート・ミニ門松づくりを地域の一般参加者を交えて行なっている。萩里山応援隊こもれびでは、ミニ門松づくりや竹垣づくりを地元住民と協働で行っている。Seeds では伐採跡地を環境学習の場とするために、地域の子供と共にビオトープ作りや植樹活動を行っている。かいろう基山では、竹伐採や下刈り作業をイベント形式で年2回開催している。また伐採跡地では植樹祭を行っている。育林市民力養成講座を開講し、森林ボランティアリーダーの養成をしている。

これらの団体では、このように竹・伐採跡地を利用し、メンバー以外の一般参加者を交えたイベントを開催している。また、このようなイベントに参加し、活動に興味を持つことで会に参加したメンバーの存在も上記4団体に見られた。

このように、一般参加者を交えたイベントを行うことで、普段の竹伐採活動に参加するメンバーを得ていることが明らかになった。新たなメンバーの加入は、竹伐採活動を行う人材の確保や後継者育成の可能性といった面で、竹伐採活動の継続には重要である。

このことから、一般参加者を交えたイベントの開催は、竹伐採活動の継続要因の1つであると考えられる。

表-9 調査結果比較表

団体名		かぐや姫の里づくりの会	萩里山応援隊こもれび	鼓南なんでもやろう会	Seeds	わいわいクラブ	かいろう基山
ヒアリング日		12/1,12/10,12/23(イベント参加),1/18(活動参加),2/18	12/9,1/19,2/14(電話)	12/21,1/20,2/14(電話)	12/22,1/21	12/27,1/30	12/13,1/24,2/7(活動参加)
ヒアリング対象者		団体代表	団体代表	団体代表	団体代表	団体代表	団体事務担当
活動場所		山口県下関市王喜地区	山口県萩市田床山	山口県周南市鼓南地区	山口県柳井市日積地区	福岡県糟屋郡新宮町寺浦地区	佐賀県三養郡基山町
会員数		10名	13名	26名	26名	20名	53名
会費		無し	年間一人当たり2000円	無し	年間一人当たり2000円	年会費3000円	年間一人当たり2000円
団体の設立年		2001年	2000年	2000年	2002年	1999年	2004年
活動目的		里山再生と地域活性化	田床山の竹林景観の改善	住みよい地域づくりと地域の連帯意識を深める	里山保全と青少年育成を通じた地域活性化	里山の風景を次世代に残す	里山再生と地域社会への貢献
活動内容	団体メンバーのみで行う活動	・竹伐採活動 ・下刈り ・タケノコ堀り ・鍋会	・竹伐採活動 ・研修旅行 ・竹炭づくり	・竹伐採活動 ・竹炭・竹酢液・ぼかし作り	・竹伐採活動 ・炭焼き ・下刈り ・ピオトープ作り	・竹伐採活動 ・植樹 ・竹炭づくり・門松づくり	・竹伐採活動 ・竹細工、竹パウダーづくり
	団体以外の住民と共に行う活動	・里山体験交流会 (タケノコ堀・そうめん流し・竹林コンサート・ミニ門松づくり) ・竹細工・竹カゴ教室 ・環境学習の講師(王喜小学校)	・門松づくり ・竹垣づくり ・竹燈籠づくり	・地区文化祭の手伝い	・お山の学校 ・里山探検隊 ・ふれあい運動会 ・風ん子どんど	・子供会に野遊びの場所を提供	・竹伐採イベント ・下刈りイベント ・植樹祭 ・育林市民力養成講座
活動参加人数の平均		10名	10名	10名	7名	12名	11名
会の平均年齢		65歳	63歳	72歳	45歳	70歳	72歳
活動に参加する会員		王喜地区及び下関市内・宇部市等の周辺都市	萩市内の住民	鼓南地区の住民	日積地区および由宇・伊陸等日積周辺の地区	新宮町および福岡市東区の住民	基山町および久留米市・春日市等基山町周辺都市の住民
一か月に竹伐採活動を行う日数		2回	1回	0.25回	不定期	1回	20回
伐採活動の作業量について		1日に100本/チェーンソー3台 10名程度で伐採	毎回およそ10名が伐採に参加 一日に50本くらい?一人5本	平均10名で活動 一日に30本程度 チェーンソーは2基	会での伐採では1日80本	12人で3時間、70本程度	一日に30本程度伐採(伐竹・枝打ち、玉切り) 1日3時間の作業で、1人3本程度
伐採した竹の利用		・竹楽器 ・門松 ・竹細工 ・そうめん流し	・竹炭 ・門松 ・竹垣 ・竹燈籠	・竹炭 ・竹酢液 ・竹箒	・竹炭 ・竹燈籠 ・企業への竹の提供	・竹炭 ・門松	・竹細工 ・竹パウダー
竹伐採後の跡地の利用		・竹林コンサート会場 ・跡地に将来展望がある (癒しの里山づくり)	伐採した場所が道路から見てきれいになるように活動	・しいたけづくりを行なっている ・竹拡大防止?としてのタケノコ採り	・林道づくり ・ピオトープ作り	・伐採跡地への植樹	・伐採跡地への植樹
メンバー間での交流活動		・鍋会 ・伐採作業中の持ち寄り会 ・勉強旅行	・研修旅行 ・伐採活動後の遊び	4月に総会、春に花見会 12月には忘年会	・イベント前の打ち合わせで情報交換会 ・忘年会	・2年ごとに研修旅行 ・ログハウスで集まり ・打ち上げ	・新年会 ・バーベキュー ・飲み会
団体の人員構成		昔は40名くらい 町内会役員などの仕事で忙しくてやめていく人 現在10名(王喜2、小月1、長府、椋野)	初期女性人6、7人 現在13名、全員萩市内の住民	鼓南地区の住民(声掛けで加入) 農林事務所の情報を見て、興味を持ち参加(1名)	初期は10名、現在26名 日積以外にも由宇伊陸の周辺地区からも	昔は16名で構成。活動の途中で会の	初期は、自衛隊基山支部隊友会のメンバー13名で構成 竹切りイベントや植樹祭に参加した人、育林市民力養成講座受講生が会員になり、現在は53名
どうやって活動に人が集まってきたか		タケノコ堀や竹細工教室等のイベントを開催、そこから興味を持った人がメンバーに加入。	竹伐採のイベントに参加し、そこから会のメンバーに加入。	メンバーの知人への声掛け	メンバーの知人への声掛け 体験イベントに参加し、興味を持った人がメンバーに加入。	メンバーの知人への声掛け	・イベント参加後に会員になる ・育林市民力養成講座受講後に会員になる ・35名が基山町、10名は福岡から、8名は佐賀県内から
伐採した箇所をどうしたいか		高齢者でも訪れやすい癒しの里山、若者の技術習得の場	道から見てきれい、手入れされていると分かる竹林 植樹の場所に使用したい	しいたけづくりなどの遊びの場所 タケノコ林にして地区の子供の遊び場	癒しの場所、遊びの場所にしたい 今後はふれあいどころ437とのつながりも考えたい	その土地にある良さを残していきたい	竹を活かした地域づくりをしたい。
活動初期はどうだったか(苦労や活動の知識について)		豊田農林事務所、西部森林組合の協力があつた	知り合いの先生から他団体の情報を得る その団体の活動を見学し、 会でも実際にやってみる	元々会員に知識があつた	農林事務所に相談 森林インストラクターから教わる	メンバーがそれぞれ得意分野があり、 それを活かして何かをする。 ノウハウに困ったことはない	山での作業の知識を持つ人が多かったため、作業手順等には困らなかった

第 5 章

結論

第5章 結論

以上、本研究では、里山における住民主体の竹伐採活動の継続要因を明らかにすることを目的とし、10年以上里山における竹伐採活動を住民主体で行っている事例6件に対し聞きとり調査を行った。そして活動内容と組織体制に着目し比較分析を行う事で、里山における竹伐採活動の継続要因を明らかにした。

1. 各団体で遊びや休憩中の雑談等、竹伐採活動に関連した会員同士での交流活動の活発さがある。
2. 各団体の竹伐採活動での作業一日あたりの作業量は異なるが、それぞれが無理のない作業量で活動している。
3. 各団体で伐採後の竹や跡地を活用するといった竹伐採活動に関連した活動があり、竹伐採活動を行う目的となっている。
4. 各団体で一般参加者を交えたイベントを開催することで、会の活動に興味を持った人が新たにメンバーに加入している。

本研究はあくまで北部九州の一部および山口県の6事例を対象としたケーススタディに過ぎない。これらの地域に限らず、わが国では竹に問題意識を抱え竹の伐採を試みる団体は多く存在するだろう。また、今回の6事例はすべて10年以上活動が継続しているが、活動が継続しなかった事例も存在すると考えられる。今後はより広い範囲で事例調査を行い、より多くの団体の里山における住民主体の竹伐採活動の継続要因を明らかにしてゆきたい。

謝辞

本論文の執筆にあたり、数多くの方々にお世話になりました。ここで感謝の意を表します。

樋口先生、ご指導ありがとうございました。研究テーマを決めたものの、何をすべきか分からない時、先生のアドバイスで自分のしていることが分かる事が多くありました。先生の「なぜ？」に困惑することも多かったですが、論文を書いていると、問題意識を持つてものを見るのが学ぶことなのかなと少しだけ分かった気がします。「師を見るな。師が見ているものを見よ」と言いますが、まだまだ己の視野が狭いことに気づき、努力していかなばと感じています。

高尾さん、榎本さん、永村さん、お忙しいにも関わらず、論文のアドバイスをしてくださってありがとうございました。不手際も多くご迷惑をお掛けしたと思います。それでも私が悩んでいる点を一緒に考えてくれた事に感謝しています。

平野さん、いつも私の論文の事を気にかけてくださいましたね。ヒアリングにも付き添いさせてもらったり、色々図々しい事をしてしまいましたが、おかげで何とか卒論を書くことができました。

研究室の皆さん、論文製作の手伝いをしてくださってありがとうございました。これからも一喜一憂しながらプロジェクトを頑張りたいと思います。

今回、ヒアリングさせていただいたかぐや姫の里づくりの会・萩里山応援隊こもれび・鼓南何でもやろう会・Seeds・わいわいクラブ・かいろう基山の皆様にも感謝の意を表します。突然こちらから連絡を入れ、現地の最寄駅まで迎えに来ていただいたり、さらに何度もお時間を取っていただいたりと、ご迷惑をお掛けしました。おかげで沢山面白い話を伺うことができました。私の力量不足で十分なまとめになっていないこと大変申し訳無く思っています。皆さんの活動からまだ色々な事を学びたく思っております。個人的に伺うことがあるかもしれませんが、その時は是非また面白い話を聞かせてください。

おばあちゃん、調査にあたり、山口県内を行ったり来たりする為に宿代わりにさせてもらったこと、ありがとう。

家族へ。いつも連絡入れなくてごめんなさい。大学4年を締めくくる論文製作に四苦八苦しましたが、自分なりに何とかやってみました。論文の調子心配してくれてありがとう。これから後2年九州で学ぶことになりますが、今以上に頑張ろうと思います。どうか体には気を付けてください。

この論文を書き、己の未熟さを知り、まだまだ学ぶ事は山ほどあると分かりました。これからも一層努力を重ね、意義のある研究室活動を送りたいと思っています。

平成 26 年 3 月 河津憲嗣